



天満宮

題字／後西天皇御宸筆

特集

◆ 梅花祭、御祭神偲んで厳かに斎行

― 今年も皇后陛下の御代拝・宮内庁京都事務所長参向

◆ 令和九年の「北野祭」斎行に向け応仁の乱で焼失の神輿復興躯体完成

◆ 天神さまと私 ― 独立行政法人国立文化財機構理事長 皇居 三の丸 尚蔵館 長 島谷 弘幸さん



御神忌 千百二十五年
半萬燈祭
未来へつなぐ誠の心

令和9年 | 2027



日本文化の中心地 京都

その文化の礎を築いた天神信仰発祥の社

北野天満宮の由緒

当宮は御祭神に菅原道真公（菅公）をお祀りした全国天満宮・天神社一万二千社の宗祀（総本社）の神社です。

天神信仰発祥の社として今から千年余り前の村上天皇天曆元年（九四七）六月九日、御神託により平安京の天門にあたる北野に御鎮座致しました。天徳三年（九五九）右大臣藤原師輔卿が御社殿を造営、一條天皇により北野祭は官祭に与り、「北野天満大自在天神」「北野天満宮天神」の神号を賜り、さらに皇室・朝廷の崇敬を受け二十二社に加えられ、臣下として初めて官幣中社に列格、皇城鎮護の神として崇められるとともに、天満宮・天神社の総本社として崇敬されてきました。

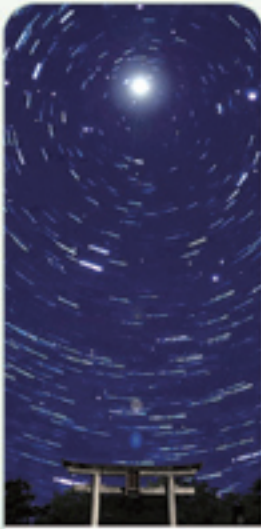
創建以来、皇室との御縁深く、寛弘元年（一〇〇四）には一條天皇がはじめて北野社に行幸されました。以来歴代天皇の行幸も二十数度に亘り、さらに將軍家や有力大名の崇敬を受けました。菅公薨去延喜三年（九〇三）より凡そ百年の歳月をかけて誕生した北野の天神信仰は、平安京の天門にあつて、朝野を問わず人々の暮らしの最も重要な指針となり今日まで育まれてきたのです。

「文道大祖 風月本主」と崇められた菅公は、和魂漢才の精神で誠の心を以って学問に勤しまれたことから、学問をはじめ芸能・農耕・厄除け・至誠・冤罪を晴らす神として奉祀されるとともに、人々の心の支えとなる神として、各時代の社会構造と相まって篤い崇敬をうけ、庶民に至るまで「天神様」として親しまれてきました。菅公は、学者・政治家また詩人・教育者として多方面に活躍され、生涯一貫された「誠の心」は、日本人の感性として現在にも生き続けています。

千有余年に亘る歴史の中で受け継がれてきた天神信仰の根本を示すのが、当宮所蔵の国宝「北野天神縁起絵巻」承久本です。数ある縁起絵巻の中で唯一無二の神社絵巻物であり、その信仰性や描かれる世界観、美術的価値は世界が認めるところであります。

また現在の御社殿は、豊臣秀吉公の遺命により豊臣秀頼公が片桐且元を奉行として、慶長十二年（一六〇七）に造営された一大建築群です。御本殿は八棟造と称され、国宝の指定を受ける桃山文化の代表的建築です。その絢爛豪華さは謂うまでもありませんが、特に多数の桃山建築の中でその創建当時の規模そのままに保存されているのは当宮が唯一のもので、後世の権現造の原型となるなど、神社建築史に多大な影響を与え続けています。

菅公の御神霊を祀る北野天満宮は、御墓所・太宰府天満宮と共に全国天満宮の宗祀と称され、日本文化の礎、学問の神様として今日も多くの参詣者が訪れています。



【シンボルマーク】

平安京の天門に位置する北極星を星梅鉢と鳥居（北野）で捉えたマーク。北野は千二百年に亘り、国都として文化を育んだ平安京にて、天の神々の出入口「天門」に菅原大神が奉祀された聖地。爾来、北野の地より全国に天神様の御神威が益々昂揚してきた。

表紙写真 — 飛梅が咲き誇る梅風祭 伝統芸能「八乙女舞」と「綾子舞」奉納 —

当宮崇敬団体「梅風講社」の祭典である梅風祭では、かつての勅祭「北野祭」に由来する当宮の伝統芸能「八乙女舞」が、御本殿前の見頃を迎えた飛梅に見守られる中、奉納された。今回は半萬燈祭記念事業として、当宮御鎮座に関わる多治比文子（綾子）に由来し、新潟県柏崎市大字女谷に約五百年前から伝わる民俗芸能「綾子舞」が特別奉納され、御祭神の御心をお慰め申し上げた。



御挨拶



当宮に遺される美的感受性豊かな日本人の精神を伝える唯一無二の御神宝「重要文化財 聖廟法楽和歌」の数々

先ず以て、聖寿の万歳と皇室の弥栄、国家の隆昌ならびに氏子崇敬者皆様方のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

去る三月二十九日、畏くも三笠宮彬子女王殿下には当宮に御成りいただき、総裁をお務めの心游舎による書道ワークショップを開かれ、子どもたちと書を通じて親しくご交流くださいました。当宮では心游舎設立の平成二十四年当初より御縁を賜り、ワークショップ等々もいち早く開催、その後、幾度も活動を重ねていただいておりますことは誠に有難く、改めまして殿下をはじめ関係者各位に感謝と御礼を申し上げる次第でございます。

世々にわたり「文道大祖 風月本主」と仰ぎ崇められた御祭神菅公は、書をはじめとするあらゆる「道の精神」を大成され、「和魂漢才」の理念を世に示されたお方です。その精神の根幹にあるものは「誠の心」であり、物事の本質を踏み外さず真実を貫く姿勢でありました。「誠の心」とは、縄文の昔より日本人が大切に守り受け継いできた「神々の心」に他なりません。菅公は、美的感受性豊かな縄文人の精神を「誠の心」として体现され、数多くの漢詩や和歌に遺されました。混沌とした平安の世にあって、外国の文化や技術が受け入れられる中、「和魂」を忘れぬよう、詩歌を縄文人の言霊と捉え、世に示されたのです。

情報化社会と云われる昨今、あふれる情報の中に、それが真実か否かを見極める識見が、今一人ひとりに求められています。菅公がその身を以て示された「真実を見極める目」と「本質を踏み外さぬ行動」は、まさにこの時代にこそ受け継ぐべき大切な生き方であります。

令和九年三月に斎行する「菅公御神忌千二百二十五年半萬燈祭」まで、いよいよ二年を切りました。半萬燈祭に向けた事業の核ともいうべき「北野祭の復興」、その象徴たる「北野神輿」の躯体も完成し、今年度はいよいよ本格的な制作に着手いたします。また北野を発祥として継承され、このたび応仁の乱以来、およそ五百年ぶりに当宮に奉納された新潟県柏崎市の伝統芸能「綾子舞」が、かつての勅祭「北野祭」由縁の当宮の伝統芸能「八乙女舞」と揃って奉納され、御祭神の御心を大いにお慰め頂きましたことは、当宮の歴史においても誠に感慨深い行事であり、感謝の念に堪えません。来る大祭に向け、当宮の歴史と伝統を重んじ、全国の天満宮・天神社の総本社として、菅公精神に則った「本筋を歩み続ける神社」であるよう、職員一同心を合わせ新年度も邁進して参ります。御神縁深き皆様には、引き続き天神信仰の発揚と天満宮護持のため、格別のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和七年四月吉日

北野天満宮

宮司 橘 重十九

菅公の祥月命日

梅花祭、御祭神偲んで厳かに齋行 今年も皇后陛下の御代拝・宮内庁京都事務所 石原秀樹事務所長参向



皇后陛下御代拝 拝礼（宮内庁京都事務所 石原秀樹事務所長）

〈菅公御歌〉

東風吹かば 白いおこせよ 梅の花
主なしとて 春を忘るな
美しや 紅の色なる 梅の花
あこが顔にも つけたくぞある

こよなく梅花を愛された御祭神菅原道真公の祥月命日に当たる二月二十五日、御本殿において午前十時から梅花祭を厳かに齋行し、御祭神の御遺徳を偲び、御神威を景仰申し上げた。今年も皇后陛下御代拝として宮内庁京都事務所長が参向され、御神前に拝礼された。

祭典には、かつて菅公に随行し大宰府に赴き、菅公薨去後、御自作の木像を奉じて京へ帰り、代々神事に携わってきた西ノ京神人の末裔・七保会の会員や門前町で京都最古の花街でもある上七軒歌舞会の代表らも参列し、篤い祈りを捧げた。

右大臣の位にあった菅公は、左大臣藤原時平の讒言によって大宰府に左遷され、延喜三年（九〇三）二月二十五日、失意のうちに亡くなられる。梅花祭は、御祭神の御遺徳を偲ぶ大変重要な祭典であり、当宮創建以来斎行され、天仁二年（一一〇九）二月二十五日には、初めて天皇の勅により斎行された、との記録も遺る。



梅花をお供え



奉幣ノ儀（七保会 神部正三宰領奉仕）





宮司 祝詞奏上



特殊神饌「梅花御供」

＊ 特殊神饌『梅花御供』奉饌

御本殿での祭典は、まず『梅花御供』と呼ばれる特殊神饌が神職によって奉饌された。『梅花御供』は、古くは御神霊を宥めると音の通じる菜種の花を供える『菜種御供』と称していたが、明治に入ると菜種の花に代わり梅の花を用いるようになり、現在の『梅花御供』となった。『梅花御供』は、蒸した四斗の米を大小二つの台に盛り付けた「大飯」「小飯」と称する熟饌で、七保会の会員が前日の二十四日、精進潔斎の上、浄火で調製したものを梅花と共にお供えする。また、『紙立』も七保会会員による謹製で、筒状にした仙花紙の中に米を入れ男女の厄年に因んで白梅を挿した四十二組と紅梅を挿した三十三組の神饌で、紅白の梅枝を挿すことから別字にて『香立』と書くこともある。また、この紙立の調製に用いられた玄米を白米と合わせて炊き込んで頂くと、災難厄除け・無病息災の御利益があると伝えられており、祭典後に厄除玄米として参拝者に授与している。

＊ 七保会宰領による奉幣の儀

七保会宰領の神部正三氏が奉幣の儀を行い、宮司が恭しく祝詞を奏上した。神部氏が祈願詞を奏した後、宮司が玉串拝礼、続いて神部氏、上七軒歌舞会会長の晴間進氏が玉串を奉って御祭神の御遺徳を偲び、世の中の安寧を祈った。

＊ 皇后陛下御代拝が御神前にて拝礼

玉串拝礼の後、皇后陛下の御代拝として参向された宮内庁京都事務所長が御本殿に参進、御神前にて御拝礼なされた。皇后陛下の御代拝は、梅花祭にかつて貞明皇后がご参拝なされた古例によるものであり、神社としての祭典と皇室の祭典が一つになって行われる全国的にも珍しい形式で、皇室と当宮の御縁の深さを物語るものである。



末社一之保神社 巡拝



茶菓子がお供えされた豊国神社



二人がかりで内陣へとお供えする

※ 末社一之保神社・御霊神社でも梅花祭齋行

御本殿での祭典終了後、引き続き当宮の御供所であった一之保神社・菅公の眷属神をお祀りする御霊社でも梅花祭を齋行、権宮司が祝詞を奏上し、七保会代表が玉串を捧げた。

※ 上七軒の芸舞妓が西廻廊で献茶ノ儀

梅花祭の祭典に先立ち、この日朝、西廻廊において今年も上七軒歌舞会の芸妓ふじ千代さんと舞妓さと葉さんが、御本殿と豊臣秀吉公をお祀りする豊国神社にお供えするお茶を点てる献茶ノ儀が行われ、多くの参拝者が見守った。また、今年も芸舞妓一人ひとりが梅花祭に思いを馳せて俳句を詠んでおり、俳句を書きしたためた短冊が御神前に奉納された。（上七軒芸舞妓からの献句は四十頁に掲載）



上七軒歌舞会 晴間進会長 玉串拝礼



梅花祭に先立ち献茶ノ儀を齋行（上七軒歌舞会奉仕）

「梅花祭野点大茶湯」賑わう
芸舞妓のお点前で一服楽しむ参拝者



華やかに野点茶会開催

梅花祭のこの日、紅梅殿船出の庭で恒例の「梅花祭野点大茶湯」が催され、上七軒歌舞会の芸舞妓のお点前で一服楽しむ参拝者で終日賑わった。

「梅花祭野点大茶湯」は、天正十五年（一五八七）、豊臣秀吉公が当宮境内で開いた「北野大茶湯」の故事にちなむ催し。千五十年大萬燈祭が齋行された昭和二十七年以来毎年催されている。上七軒歌舞会の協賛によって芸舞妓や女将が総出で奉仕するため、毎年人気が高く梅花祭の呼び物となっている。

混乱を避けるため今年も文道会館内のホールで順番待ちし、次々船出の庭の席に就いた。

外国人の姿も目立ち、周囲の日本人参拝者の作法を見ながら一服を楽しんでいた。例年なら周囲の梅は見ごろだが、今年はまだ咲き初めの状態。それでも雪の心配のない好天とあって「昨日のような雪空でなかったのは幸い」とする参拝者の声が、あちこちで聞かれた。



外国人観光客はじめ多くの参拝者が参加



心游舎ワークショップ



彬子女王殿下御挨拶

彬子女王殿下御来駕

心游舎「書道」のワークショップ開催
御自身も筆を持たれ、受講者と共に稽古

彬子女王殿下が三月二十九日、当宮にお成りになり、総裁を務められている心游舎（一般社団法人）の「書道」のワークショップに臨まれ、ご自身も筆を持たれ受講者約三十人と御一緒に稽古に励まれた。

心游舎は、「日本の伝統文化を未来に」という彬子女王殿下の強い思いに共鳴した石清水八幡宮田中恆清宮司の呼掛けによって平成二十四年に設立された団体。趣旨に沿った活動を毎年各地で行われており、当宮にもその後より御来駕され、水墨画・歌舞伎・書き初めといったワークショップなども開催されている。

この日、彬子女王殿下と受講者らが、御本殿に昇殿参拝した後、文道会館に移動しワークショップが始まった。冒頭、彬子女王殿下が「たくさん参加者があり、書への関心の高まりを感じています。私は墨をすっていると、だんだん心が穏やかになり、緊張もしますが書と自分と向き合う時間を大事にしています。初めての方もおられますが、先生は大変ほめ上手なので、気分良く書いて下さい」と、挨拶された。続いて権宮司が、管公の称号ともなっている「文道大祖 風月本主」について説明し「当宮の御祭神である管公は書道をはじめ、あらゆる「道」の神として信仰を集めてきた。「道」の精神こそ、管公精神そのものであり、当宮は学問・文化・芸能を志す者たちの聖地である」と紹介した。

ワークショップの講師は書家の神郡宇敬先生。墨のすり方から始まり、筆のほぐし方、筆の根本まで墨を入れ、腕を使って書くなど懇切丁寧に指導され、縦線、横線を書くという基本の稽古を行った。そして、各席を回りながら「いいぞ、いいぞ」「よく書けているよ」と、アドバイスの掛け声を送っておられた。

こうして三時間半、清書となり「東風」「陽春」「新学期」などなどの作品が出来上がった。この日のために自宅で練習もしたという京都市の小学校一年生の女児は「楽しかった」と、感想を述べた。

神郡先生は「限られた時間で、みなさん一所懸命書いており、気持ちの籠った素敵な作品になった。今後も文字を書く時は、気持ちをしっかりこめて書いて下さい」と講評し、彬子女王殿下の「声を掛けるのが憚られるほど、みなさん一心不乱に書いておられた。今後も筆を持ち続けてほしい」との結びの御挨拶で書道のワークショップを閉じられた。



神郡宇敬先生による指導



御本殿にて正式参拝

令和九年の「北野祭」斎行に向け 応仁の乱で焼失の神輿復興躯体完成

躯体が完成し、清祓式を斎行 御本殿前中庭でお披露目



大勢に見守られる中、行われた槌打ちの儀



奉納奉告祭

勅祭北野祭の姿を今にと、二年後の菅公御神忌千二百二十五年半萬燈祭に際し応仁の乱で失われた神輿の再興に取り組んでいるが、神輿の本体が完成し、御縁日の三月二十五日、御本殿と中庭で躯体の清祓式を斎行した。

御本殿では斎主が祝詞を奏上し、巫女舞が奉奏された。宮司の玉串拝礼に続き北野神輿会の井上経和会長らが玉串拝礼し、躯体完成を御奉告した。

この後、中庭に奉安された躯体の清祓の儀が執り行われ、大幣・切幣おおぬさ きりぬさで祓い、屋根の上部を木槌で打つ儀式もあり、多くの参拝者が見入った。

完成した躯体は、京都・美山と長野・南木曾から切り出したヒノキ材が使われ、屋根は中世の神輿の形を踏襲した八角形で、屋根幅一・九メートル。総高二・二メートル、担ぎ棒の長さは五メートル。今後、黒の漆が塗られ、飾り金具を取り付け、豪華な西陣織の懸装品で飾り、屋根の上には鳳凰飾りが取り付けられる。

失われた北野祭の神輿をよみがえらせるため、約二十年前から学者・有識者らが調査研究し、北野神輿会が中心となつて復興を進めていた。七年前、校倉から北野祭の神輿を飾っていたと見られる鎌倉・室町期製作の古い飾り金具が発見され、復興への弾みがついた。

中庭での式典を終え宮司が「勅祭北野祭は室町時代を代表する祭りだったが、残念ながら応仁の乱で神輿も焼失してしまった。北野祭礼図絵巻にその姿は遺されており、北野神輿会の井上会長のご尽力で復興されることになり、こうして完成した躯体を見て感無量だ」と挨拶した。

井上会長も「大きさ的にはかなり勇壮なものを創った。これに西陣織の織物や飾り金具類がつくと素晴らしいものになる。半萬燈祭を盛り上げる神輿となる」と、喜びを話された。



関係者に担がれ御本殿へ参進



お披露目された神輿の躯体



北野祭再興に 向けての 取り組み

当宮では、菅公千二百二十五年半萬燈祭に向けて、かつての北野祭の再興を目指し、当宮の歴史を繙き、途絶えていた祭典や旧儀の復興に務めている。

中でもかつての勅祭「北野祭」の再興は、今回の半萬燈祭斎行の中で中核を成す取り組みである。

北野祭は、長い歴史の中で語り継がれる幾多の戦乱や時流の変遷を経て、「例祭」と「瑞饋祭」のふたつの祭礼に分かれた形で引き継がれていたが、この北野祭を元の祭礼形式に戻し、歴史と伝統に彩られた神事として復興させるため、「北野神輿会」を結成し、祭礼の中核ともいべき「神輿」の再興に取り組んでいる。

北野祭を今に伝える神社絵巻『北野祭礼図絵巻』には、京の都の風情豊かで雅な行列の様子が描かれ、一際目を引くのが、絢爛豪華な飾り金具や織物で装飾された御鳳輦、鮮やかな生花を頭頂に頂いた花傘、八乙女稚児行列、田楽や獅子舞等の伝統芸能であり、雅な平安王朝文化を現す京都随一の祭礼であった。

遺された史料から学術的研究を進め、北野の歴史と伝統を重んじた意匠、信仰の尊厳に相応しい神輿、そして宮司就任時より北野祭を復興するために約二十年に亘り取り組んできた橘宮司の思いが、去る三月四日の京都新聞に掲載された。

2025年(令和7年)3月4日 火曜日



北野天満宮 2027年に「半萬燈祭」

神輿ある祭礼列 令和の復活悲願

橘重十九 宮司に聞く
失われた儀式 取り戻す使命

「信仰の尊厳にふさわしいにぎわいを」

京都府京都市上京区の北野天満宮は2027年、祭神・菅原道真公没後1125年の節目に「半萬燈祭」を営む。25年に1度の祭礼とあって、すでに提灯点灯などの先触れ行事が始まっている。どのような思いで半萬燈祭に臨むのか。来年度で宮司就任20年を迎える橘重十九宮司（76）に聞いた。（大西幹子）



「天神さんには多様な信仰があることを発覚し、次世代に継いでいきたい」と語る橘宮司（京都市上京区・北野天満宮）＝撮影・安達寛文

「北野祭は、菅公千二百二十五年半萬燈祭に向けて、かつての北野祭の再興を目指し、当宮の歴史を繙き、途絶えていた祭典や旧儀の復興に務めている。中でもかつての勅祭「北野祭」の再興は、今回の半萬燈祭斎行の中で中核を成す取り組みである。北野祭は、長い歴史の中で語り継がれる幾多の戦乱や時流の変遷を経て、「例祭」と「瑞饋祭」のふたつの祭礼に分かれた形で引き継がれていたが、この北野祭を元の祭礼形式に戻し、歴史と伝統に彩られた神事として復興させるため、「北野神輿会」を結成し、祭礼の中核ともいべき「神輿」の再興に取り組んでいる。」

「かつての北野祭は、菅公千二百二十五年半萬燈祭に向けて、かつての北野祭の再興を目指し、当宮の歴史を繙き、途絶えていた祭典や旧儀の復興に務めている。中でもかつての勅祭「北野祭」の再興は、今回の半萬燈祭斎行の中で中核を成す取り組みである。北野祭は、長い歴史の中で語り継がれる幾多の戦乱や時流の変遷を経て、「例祭」と「瑞饋祭」のふたつの祭礼に分かれた形で引き継がれていたが、この北野祭を元の祭礼形式に戻し、歴史と伝統に彩られた神事として復興させるため、「北野神輿会」を結成し、祭礼の中核ともいべき「神輿」の再興に取り組んでいる。」



菅公御神忌千百二十五年半萬燈祭に向け
皆燈講より二基の提灯が奉納 併せて
「大丸京都店」が約七十年ぶり楼門に特大提灯を奉納



梅風講社皆燈講による特大提灯



皆燈講により毎月御縁日に灯火される石灯籠

二年後に迎える菅公御神忌千百二十五年半萬燈祭に向けて当宮正面に当たる楼門に梅風講社皆燈講より二基の提灯が、また「大丸京都店」より特大提灯を奉納され、一月十五日、御本殿で奉納奉告式、また楼門で提灯清祓式を斎行した。

萬燈を担ってきた梅風講社皆燈講

当宮崇敬団体である梅風講社皆燈講は、毎月縁日の灯明や境内の石灯籠の灯火を担ってきた。かつて萬燈の際には境内中に燈明舎を設け御祭神の御神霊をお慰めする為、参拝者が火を灯していたが、そうした灯明も皆燈講が管理しており、萬燈の担い手であった。現在では安全面から提灯へと姿を変えたが、萬燈に際し重要な役割の担い手であることに変わりはなく、今回の特大提灯奉納も、そうした篤い信仰の現れである。

現在につながる大丸からの篤い信仰

「大丸京都店」の歴史は、京都の呉服屋から始まった。北野天満宮の氏子区域には呉服には欠かせない織物の一大生産地である西陣があり、織物業から篤い崇敬を寄せられており当宮と大丸のご縁は大変深い。昭和二十七年の菅公御神忌千五十年大萬燈祭に当たっては縦型の大提灯を奉納されており今回の特大提燈奉納は、その御神縁を現在に引き継ぐものである。

御本殿での奉納奉告式は、株式会社大丸松坂屋百貨店大丸京都店の山崎敏子店長を始め社員約二十人の参列の下に斎行。この後、楼門に移動して清祓式に臨んだ。掛け声とともに綱が引かれ、覆いが外れると、見事な特大提灯が現われ、見守る社員らから歓声と拍手が上がった。



現在に続く御神縁が楼門を明るく照らす



御神忌千五十年大萬燈祭にて撮影された集合写真



新たに大丸から奉納された特大提灯

湯島天満宮に唯一の「飛梅」を植樹 天神信仰発祥の地からお江戸の天神様へ



当宮御本殿前に咲き誇る飛梅

当宮御本殿前に植わる紅梅は、菅公の御自宅である紅梅殿で育てられた梅の原種にして、史実に基づく日本最古の紅梅「飛梅」であり、全国に伝わる飛梅伝説の根本である。

当宮所蔵『宮仕日記』の寛政五年（二七九三）十一月二十五日の条には、飛梅木の石碑を建てるか

「庭上の梅の木は、いわゆる飛梅種に間違いはないが、飛梅木の石碑を建てるかどうか」と京都西町奉行所に提案したところ、「飛梅であるのは衆目の知るところであり、殊更石碑を立てる必要はない」とのやり取りが交わされており、江戸時代後期にはすでに「飛梅伝承」の御神木として特別視されていたことがわかつている。

千有余年にわたり先人たちによつて大事に守り伝えられてきたが、徐々に樹勢が弱まってきた。そこで住友林業株式会社に協力を依頼し、様々な調査研究に着手し、平成二十七年には世界で初めて花梅の組織培養に成功、令和四年には培養した飛梅が無事開花し、飛梅を未来へつなげる一大プロジェクトが成功した。

令和九年に菅公御神忌千百二十五年半萬燈祭を斎行する当宮では様々な取り組みを行っ



湯島天満宮御本殿にて奉告祭



当宮宮司による植樹の儀

ており、その一環として当宮より御神霊を分霊したと伝わり、江戸における天神信仰の中心であった東京の湯島天満宮に組織培養された飛梅の奉納が一月二十四日に行われた。

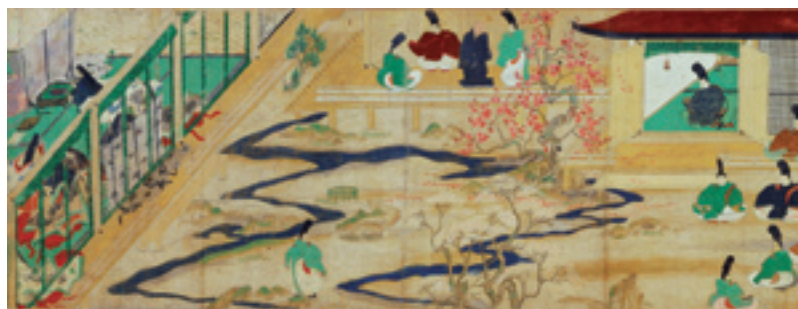
湯島天満宮で斎行された奉納奉告祭では、御本殿で当宮宮司や湯島天満宮の総

代が参列する中、「紅わらべ」の奉奏など厳粛に斎行され、植樹祭では、大勢の参拝者に見守られながら湯島天満宮押見友仁宮司、当宮宮司による植樹の儀が執り行われ、無事湯島の地に飛梅が植栽された。

湯島天満宮宝物殿にて
「お江戸の天神信仰」展開催
江戸に纏わる御神宝を関東にて初公開

湯島天満宮は、正平十年（一三五五）に当宮より御祭神を勧請し、天満宮としての歴史が始まった。以降、江戸時代には当宮と共に朝野から篤い崇敬を受けてきた。

此度、江戸時代の両社に対する深い天神信仰を物語る御神宝の数々を、四月五日から五月二十五日まで同天満宮の宝物殿にて展覧する。北野天満宮からは関東では初の公開となる、江戸に纏わる様々な御神宝を出展する。



国宝北野天神縁起絵巻〔巻三〕紅梅殿別離 ― 見事な紅梅が描かれている

梅花満開の中の梅風祭斎行

新潟柏崎の綾子舞と八乙女舞が共演
五百年の時空を超えた「里帰り奉納」



満開の飛梅に見守られ、八乙女舞奉納



御本殿で綾子舞を奉納

崇敬者組織の梅風講社（小石原満講社長）の祭典を三月二十三日、御本殿で斎行した。講社の八乙女舞に加え、当宮と縁のある新潟県柏崎市の綾子舞が奉納され、ひととき賑やかな梅風祭となった。

綾子舞は、柏崎市の山里で約五百年前から伝承されている古雅な民俗芸能。「北国武太夫」という武士が、北野天満宮の巫女文子の舞を伝えた」とする有力な説があり、重要無形民俗文化財に加え、ユネスコ無形文化遺産にも登録されている。各地で公演を行ってきたが、縁のある当宮では初めてであり、五百年の時空を超えた「里帰り奉納」となった。

斎主の祝詞奏上の後、緋袴、おすべらかしの髪を花で飾ったお馴染みの八乙女が鈴舞を優雅に舞った。続いて綾子舞の奉納に移り、振袖、頭に「ユライ」と呼ばれる赤い布を被った女性が笛や太鼓、京都の地名が次々出て来る小歌に合わせたの踊りなどを二座交代で奉納した。

小石原講社長、今回の里帰り奉納の実行委員長を務められた山田明彦氏が次々玉串拝礼された。

この日、地元新潟からの三十人に加え、綾子舞を支援する人たち約四十人も参列した。

御本殿での祭典後、中庭でも八乙女舞と綾子舞の奉納があり、梅花見ごろの中、多くの参拝者が地元京都と新潟の舞に見入った。踊りを見ていた女性参拝者は「新潟の山里に伝わる舞が、北野天満宮と縁があるとの説明を聞いて興味深く見た。歌の中に京都の地名も出てきて不思議な感じがした。素晴らしかった」と、感想を述べた。

山田実行委員長は「綾子踊りは五百年間何も変わっていない。それを縁のある京都の皆さんに披露することが出来て、大変うれしい」と話された。尚、八乙女奉仕者は以下の通り（順不同）。

森田桜さん・菅ひまりさん・菅きほりさん・川島采唯さん・小川綾花さん・霜野小榛さん・上原伊都季さん・浅野笑鈴さん。



大観衆が綾子舞に見入った

綾子舞と当宮のご縁をひもとく

当宮から伝播し北陸 柏崎で大切に継承されてきた民俗芸能 — 綾子舞 —

北野文化研究所 室長 松原 史

新潟県柏崎市に古くより伝わる綾子舞は、令和四年（二〇二二）末、「風流踊」の一つとしてユネスコ無形文化遺産に登録された。令和五年（二〇二三）、登録の記念事業実施を模索されていた「柏崎市綾子舞保存振興会」の皆様と当宮とのご縁がつながり、綾子舞、そして京でのややこ踊・歌舞伎踊発祥の地である北野天満宮での奉納が実現する運びとなったことは、まさに御神縁のなせる業であるといえるだろう。本号では、令和七年（二〇二五）三月二十三日（日）の梅風祭にて、当宮に伝わる復興八乙女舞とともに中世に当宮から伝わったとの伝承が残る綾子舞の奉納が果たされたことを記念して、あらためて法楽としての歌舞音曲、そして八乙女舞と綾子舞の歴史に関してひもといきたい。

○はじめに—御祭神に捧げる歌舞音曲

古来、神をお慰めし、世の平安と人々の安寧を祈る際には、祝詞や経とともに様々な歌舞音曲が神に捧げられてきた。和歌、漢詩、連歌、御神楽、舞楽、雅楽、声明等に加え、流行歌であった今様や白拍子など、度々奉納されており、また古文書の中に見る歴代の萬燈祭の通りの様々な祭祀の中にも、歌舞奉納の様子が見て取れる。歌舞音曲の奉納は、神を慰めるのに必須の要素であり、それが故に発展してきたと言っても過言ではない。また芸能者自身も神に芸能を奉納することで結縁を結び、自身の芸の上達を祈念した。



図1 重要文化財 舞楽図 北野天満宮蔵

当宮に根本障子（衝立）として伝わる「舞楽図」にも、御本殿の前ならびに境内右近の馬場にて舞楽が奉納されている様子が描かれている。

○北野祭の渡御列にみる歌舞音曲と八乙女

神仏に歌舞音曲を捧げてお慰めすることを「法楽」という。室町時代に最盛期を迎え、応仁の乱によつて途絶えた荘厳な渡御列を伴う北野祭には、歌い舞う多数の芸能者の姿を見ることができ、祭祀の次第の中にも雅楽や舞が奉納される様子が記録されている。また祭列の中心である御神輿を先導したのは、八乙女と呼ばれた女性たちであり、そこに北野の祭祀の特異な点を見ることが出来る。

梅風祭で披露されてきた当宮の八乙女舞も、古くより伝わるものであるが、残念ながら世の騒乱により一度絶えてしまい、昭和の世に崇敬者諸氏の熱意とご尽力により復興され、現在も弛まぬ努力のもと継承されているものである。

○北野天満宮創建に関わる巫女

— 文子（奇子・綾子）

* 様々な漢字表記があるが当宮では文子を用いている
北野天満宮創建の物語には、多治比文子という巫女が、菅原道真公より北野の地に祀ってほ



図2 祭礼図絵巻 北野天満宮蔵

しいという御託宣を受けたと伝わっている。しかし幼く裕福とはい難かった文子は、西の京の自宅に小さな祠を建てて祀るのが精一杯であった。その後朝日寺の太郎丸に重ねての託宣があり、無事北野の地に菅公は祀られることとなった。

しかし初めて託宣を受け天神信仰の礎を築いた人物であるともいえる文子は、やはり重要な人物であり、菅公が薨去されてのち約五十年ごとにおこなわれてきた式年大祭―萬燈祭においては、斎場図のなかに「文子」という人物の座る位置が図示されていたりする。

文子の文字は群書類従の中では奇子と記されるなど様々な漢字が当てられている例が散見されており、また文子の存在も巫女であるという当宮の言い伝えの他にも、菅公の乳母であった女性の名前とする説や、菅公の妹の名前だったとする説など多種多様な言い伝えが各地に残っている。ただ、菅公ならびに天神信仰にとって「あやこ」という存在が、特別なものであることは間違い無いといえるだろう。

○綾子舞とは―そのルーツと継承―

さて、当宮にとって特別の響きを持つ「あやこ」という名を冠した民俗芸能、綾子舞とはどういったものなのだろうか。

綾子舞は、新潟県柏崎市、黒姫山の麓の鶴川地区女谷で約五〇〇年前から伝承されてきた民俗芸能である。柏崎は豪雪地帯で、冬には雪に覆われ集落間の移動も容易ではない。かつては、いくつかの集落がそれぞれの芸風で綾子舞を守っていたが、明治時代に入ると次第に途絶え、現在では「高原田」と「下野」という二つの座元（保存会）が先祖伝来の芸能を受け継いでいるという。何度も断絶の危機に瀕した綾子舞は、芸を継承をしていくため、行政、学校な



図3 八乙女舞

どとも協力し、現在積極的な伝承学習の機会を設けている。

約五〇〇年前とされる綾子舞の伝播のルーツに関しては諸説あるが、その有力な一説は、京都の北野天満宮の巫女文子の舞を、北国武太夫という武士が伝えたとするものである。他にも、十六世紀に越後の守護、上杉房能の妻綾子が女谷に舞を伝えたとする説などもある。

くり返しになるが綾子舞は、初期歌舞伎の面影を残す芸能として高く評価され、昭和五十一年（一九七六）、重要無形民族文化財の第一回目の指定事業において指定を受けた。ついで令和四年（二〇二二）、前述の通り「風流踊」の枠組みでユネスコ無形文化遺産に登録された。平成十五年には、天皇皇后両陛下の行幸啓に際し、天覧に預かっている。

○北野天満宮と綾子舞のご縁―歌舞伎発祥の地からの伝播―

綾子舞の起源としては、前述の通り北国武太夫が、北野天満宮の巫女「文子（奇子・綾子）」の舞を伝えたとの説が最も有力である。

また綾子舞は、「小歌踊」「囃子舞」「狂言」の三種類の芸で構成され、それぞれに演目が伝承されているが、「小歌踊」は元々「ややこ踊」がその原型だと伝わる。事実、綾子舞には出雲の阿国に始まる歌舞伎踊りらしい所作が見られ、その装束にも歌舞伎の絵図にのこるような特徴を見つけることができる。

歌舞伎の祖と言われる出雲の阿国が、その「ややこ踊」を京都で初めて踊ったのは、ここ北野天満宮の門前であった。当宮から、ややこ踊、歌舞伎踊が京の街々、そして全国へと伝播していき、柏崎でも代々大切に伝えられてきたとも考えられるのである。「小歌踊」という芸態自体が、北野天満宮と綾子舞とのご縁を物語っているといえるだろう。

○綾子舞の特徴と当宮ゆかりの奉納演目―小切子踊と小原木踊―

また演目の中にも、京都や菅公を題材とするものが伝えられている。この度奉納された小切子踊と小原木踊は、まさに菅公ならびに京都ゆかりの演目であると言える。

小切子踊は、菅公が無実の罪によって大宰府に配流される前夜、都七条坊門の文（あや）という娘が「心を込めて見送るように」と夢の中でお告げを受け、三条大橋のたもとで綾竹（小切子）を持って別れの舞を舞ってお見送りをしたことが

起源とされる。ここでも夢のお告げを受けて菅公のお見送りをした存在として「文（あや）」という人物が出てくるのは大変興味深い。

綾子舞の装束の特徴の一つが「ユライ」と呼ばれる赤い被りものである。下野と高原田の両座元ではその結び方が多少異なることだが、基本的には頭に巻いた布を前で結び止め、残りを後ろへ長く垂らしている。この度の高原田の小切子踊の際には、「ユライ」の上に天冠を戴く姿で演目が披露されていた。その姿は、数ある出雲阿国を描いた歌舞伎図の中に大変よく似た装いを見つけることができる。

小原木踊は、京都の大原に住む「大原女」が、都に住む恋しい人に会うために薪や薫物を売って歩く様を表現したという当地ゆかりの演目である。歌詞の中にも京都の地名が散りばめられており、踊り手は扇を手にして、美しい手振りによって恋する女性の様子を表現している。

こうした装束の特徴や「袖振り」のない振り付けは、小袖の時代であった中世の特徴を色濃く受け継いでいるとの指摘がある。また綾子舞の踊りとしての美しさに関しては、腰を曲げ深く落とす姿勢を保ち、優雅な手振りで統制の取れた動きをする点が上げられる。



図4 小切子踊（高原田）



図5 小原木踊（下野）

○むすびにかえて―八乙女舞と綾子舞の再会―

菅公御神忌千二百二十五年
半萬燈祭を控えたこの時期に、歌舞伎発祥の地で一度は絶えてしまいつつも、戦後、梅風講社の皆様の努力で復興され受け継がれてきた「八乙女舞」と、北野の地から北陸地方に伝わり彼の地で受け継がれてきた「綾子舞」が梅風祭にて再会し、共に奉納する貴重な機会を得たことは、大変意義深いことであつた。

また柏崎市綾子舞保存振興会の皆様が、此度の下野と高原田両座の奉納を目頭を熱くしてご覧になつている姿を拝見し、何度も途絶の危機にあつた芸能を守りぬいてこられたご苦労と、この奉納にかける思いを拝察し、当宮職員や梅風講社に携わる者一同も胸が熱くなる思いであつた。この度のご縁に感謝し、この良縁が今後もつながっていくことを心よりお祈り申し上げたい。

【主要参考文献】

- 『綾子舞パンフレット』 柏崎市綾子舞保存振興会発行
- 『重要無形民俗文化財指定20周年記念出羽・本歌・入羽―綾子舞、21世紀への伝承』 平成八年 柏崎市綾子舞後援会発行
- 畑正高『香三才』平成十六年 東京書籍株式会社
- 『綾子舞ユネスコ無形文化遺産登録記念誌―AYAKOMAI世界へ―』 令和六年 綾子舞ユネスコ無形文化遺産登録記念事業実行委員会



図6 奉納後の八乙女舞・綾子舞の舞姫たち

北野文化研究所の

研究員二人が講演

松原室長が

「菅原道真公と北野天満宮」
と題し京都アスニーで



北野文化研究所の松原史室長は二月十四日、京都アスニーで「菅原道真公と北野天満宮」と題し講演した。

御霊信仰から様々な御神徳を持つ善神へと変わっていく天神信仰の諸相や、二年後の菅公御神忌千百二十五年半萬燈祭に向けての、令和の北野祭再興の取り組みなどを紹介する結びまで二時間にわたって話した。

「天神さまとは、全国に一万二千社の菅公を祀る神社の総称で、その総本社が天神信仰発祥の地である北野天満宮である」と前置きし、菅公の御誕生から薨去までの歴史的な流れを述べ「菅公は学問の家柄だったが、宇多天皇の親任を得て政治の場でも力を発揮された。それ故、藤原氏の嫉妬を買い、大宰府への左遷に繋がった」と解説した。

菅公を冤罪に陥れた藤原氏は祟りを恐れ、当初は怨霊を鎮める御霊の神として信仰された。「奉納された御神宝を見れば信仰がわかる」とし、皇室や室町幕府、豊臣家、徳川家、加賀前田家などの例を示しながら学問・厄除け・芸能・武芸・農耕などなどの御神徳を元に善神に転化していったという。「天神信仰は時代時代に、皇室・公家・武士・一般庶民、様々な方から崇敬を受けるとい稀有な形で千年の歴史を紡いできた」と述べた。

北野祭は「天神の神号を賜った一條天皇によって始められた勅祭で、北野御霊会として国を守る祭祀であった。室町時代が最盛期だったが、応仁の乱により途絶えた」とした。北野御霊会は、比叡山延暦寺と共に神仏習合で行われており、令和二年、コロナ退散を願って再興され、以後毎年斎行されている。そして、北野祭は華やかな巡行列を伴うものだったとし、室町時代の絵巻を示しな



大勢の参加者が耳を傾けた

がら鉦が先導し、楽を奏でる豪華な渡御列を紹介した。神輿は三年一請会と称し三年に一度大規模修繕が行われ、その渡御は、朝廷に所属する禁裏駕輿丁によって担がれたという。今、その神輿を再興中であり、「初公開だ」として完成予想図を示した。そして「神社では、いま神輿の再興だけでなく半萬燈祭に向けて様々な取り組みをしており、見守ってほしい」と、結んだ。

西山特別研究員が 「北野天満宮と梅の文化史」 と題し風月殿で



北野天満宮と梅の深いつながりを学んだ



講座に先立ち御本殿で正式参拝

北野文化研究所の西山剛特別研究員（京都文化博物館主任学芸員）は二月二十二日、風月殿で「北野天満宮と梅の文化史」と題し講演した。京都新聞創刊百四十五年記念社外特別講座として行われたもの。

西山研究員は「神木としての梅と用木（実態）」としての梅について考え、北野天満宮の梅とは何かに迫りたい」と述べた。菅公は時平の讒言で大宰府に流されるが、その旅立ちの時に紅梅殿で詠んだ「東風吹かば…」の歌は、あまりにも有名そこから飛梅伝承が生まれるが、「信仰に至る回路が全部用意されているすごい歌だ」とした。そして、菅公が大宰府で創った作品をまとめた『菅家後集』の中にある「謫居春雪」という詩をもとに「望郷の気持ちを梅になぞらえて雪を詠んだ素晴らしい作品」と話した。さらに北野の地は、平安の世以来梅の聖地だったとし、梅に纏わる様々な文化や伝承も紹介した。

「用木としての梅については、豊富な室町時代の史料に基づき説明したい」とし、『北野社家日記』を引きながら梅ヶ枝や梅の実が、北野社からの贈り物として使われた例を幾つも紹介した。例えば長享三年（一四八九）三月三日の条では、足利義政の娘に梅ヶ枝が贈られたことが記されており、また、別の条では義政に青梅が贈られたことや、將軍自らが北野社の梅の出来具合を心配する記述があることも紹介した。また、咲き誇る梅花の下で梅見の大宴会が開かれた記事や、勢力絶頂期の義満が側近とともに参籠して千句連歌会を催し、その時の発句が「梅」だったとするなど梅の話題は尽きない。梅見の賑わいは『北野社頭図』なども示しながら身分差なしに楽しむ様子などを明らかにした。

北野社の梅は信仰的な付加価値がある梅なので、他の梅とは違う。「北野社が梅ヶ枝や梅の実を効果的に贈答することにより政治権力者との密接化を図ってきたことがわかる」とし、また「梅見は北野の衆の絆確認の場だった」とし、「梅という植物を通し、外と内の行為を巧妙に切り分けていた」として講話を閉じた。

なお、受講者は開講前に御本殿に昇殿参拝し、閉講後は神職らの案内で境内を巡拝、御本殿前の飛梅を見学するなどした後、この日の演題でもあった梅の木がたくさんある梅苑「花の庭」でくつろいだ。



神職の案内で飛梅について学ぶ参加者

菅公御神忌千百二十五年半萬燈祭記念 全国天満宮梅風会特別展 来春、北野天神展開催決定

菅公御神忌千百二十五年半萬燈祭記念事業の一環として、来春、京都国立博物館において特別展「北野天神」を開催する。令和九年に迎える式年大祭に向けて、全国天満宮梅風会（会長 北野天満宮宮司 橘重十九）で、東京・京都・九州の国立博物館にて行う天神様の特別展の先陣を切って開催する記念展となる。

平成十三年（二〇〇一）に同じく京都国立博物館（のち巡回）にて行われた「北野天満宮神宝展」以来、約二十五年ぶりに行うこの度の大規模な特別展では、史上初となる国宝「北野天神縁起絵巻（承久本）」の全巻全場面公開を行うほか、重要文化財「北野天神縁起絵巻（弘安本）」、「北野天神縁起絵巻（光信本）」、「北野天神縁起絵巻（光起本）」など、貴重な絵巻を惜しみなく展示し、天神信仰成立すなわち「天神さま、はじまりの物語」を皆さまにご覧いただく予定である。

また京都国立博物館と北野文化研究所による近年の調査で明らかになった新発見の御神宝や、全国の天満宮・天神社・寺院に伝わる貴重な宝物を一挙公開する。詩歌の神、天神様を物語る令和六年（二〇二四）に新たに重要文化財に指定された「北野天満宮聖廟法楽和歌」や、天神様をお慰めするために神職の必修科目とされた連歌に関する御神宝、創建以来、長きに渡る神仏習合のもと本山末寺の関係であった比叡山延暦寺や曼殊院門跡とのご縁を物語る作品、江戸時代、北野の天神様と長谷寺の千手観音は本地垂迹の関係であるとされてきた当宮と長谷寺のご縁、神仏習合の諸相を物語る御神宝など、様々な切り口から天神信仰の広がり进行を明らかにしていく。

そして武神としての天神様への信仰をものがたる武運長久を願った奉納品の数々として、兄弟刀として現代の新たな信仰を生み出している当宮の太刀鬼切丸 髭切と、大覚寺ご所蔵の太刀 薄緑 膝丸を揃えて展示予定である。

生前の菅公の御事績から天神信仰成立、そして平安京の天門に鎮座した北野天満宮を中心として全国で広がった天神信仰の多様な側面と、これらが日本文化の中で果たしてきた重要な役割をひもといていく。

会期／令和八年（二〇二六）
四月十八日（土）～六月十四日（日）
会場／京都国立博物館
※令和九年夏・東京国立博物館、令和九年秋・九州国立博物館にて全国梅風会特別展を開催



図3（右）太刀 鬼切丸 髭切 北野天満宮蔵
図4（左）太刀 薄緑 膝丸 大覚寺蔵



図2 御神影 遣教院本
（比叡山延暦寺旧蔵）
北野天満宮蔵

図1 御神影 根本御影
北野天満宮蔵

史上初！

国宝 北野天神縁起絵巻(承久本)
全巻全場面公開



北野天神

特別展

Special Exhibition

KITANO
TENJIN

Shinto God of Scholarship

April 18-June 14, 2026

2026年

4/18(土)6/14(日)

※期間中、一部の作品は展示替または巻替を行います。

主催 京都国立博物館、北野天満宮、読売新聞社
特別協力 全国天満宮梅風会

開館時間 午前9時～午後5時30分

※毎週金曜日は午後8時まで ※入館は各閉館の30分前まで

休館日 月曜日 ※ただし、5月4日(月)祝日は開館

※観覧料等の情報は決まり次第、京都国立博物館のウェブサイト等でお知らせします。

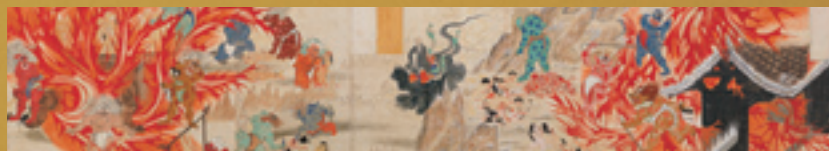
天神さま、はじまりの物語。

京都国立博物館

KYOTO NATIONAL MUSEUM 平成知新館【東山七条】

〒606-0931 京都市東山区茶屋町 527

電話 075-525-2473 (テレホンサービス) <https://www.kyohaku.go.jp/>



国宝 北野天神縁起絵巻(承久本) 最上段右から巻2／巻3／巻4／巻5／巻6／巻8 ★いずれも部分 京都・北野天満宮



独立行政法人国立文化財機構理事長
皇居 三の丸尚蔵館 長 島谷 弘幸 さん



今号は、文化財の保存や活用に尽力されている独立行政法人国立文化財機構理事長で皇居三の丸尚蔵館長の島谷弘幸さんをお招きし、宮司と話しあって頂いた。

(構成・編集部)

宮司 当宮はあと二年で菅公御神忌千百二十五年半萬燈祭を迎えます。萬燈祭については『広辞苑』でも「萬燈会」として「東大寺・高野山・北野天満宮で行われた」と紹介されている二十五年ごとに斎行する重要祭典です。祭典に先立ち全国梅風会の協力の下、京都・九州・東京の三国立博物館で記念の展覧会を開くことが決まり、大変喜んでいきます。九州国立博物館の前館長であり、東京国立博物館の副館長でもあられた島谷先生のお力添えもあったものと感謝しています。まず三会場での展覧会についての感想をお聞きます。

— 国立の三博物館で “天神展” を開く意味は大きい

島谷 やはり、天満宮の発祥の地、北野さんのある京都でやるというのは大きいです。なおかつ、太宰府天満宮のある九州国立博物館で出来るということ、さらには日本の文化・経済の中心である東京の東京国立博物館で出来るということ。この三会場でやるということ、日本各地の方にご覧

頂けるのではないかと期待していますし、我々博物館の人間にとっても名誉なことだと考えています。単に美術品がきれいだというだけでなく、こうした文化財がどういう思いで遺されたのか、来られた方に感じ取って頂けたらいいなと思っています。ともかく三つの国立博物館で天満宮縁の展覧会を開く意味は大きいです。

宮司 その先陣を切る形で令和八年の四月から六月にかけ、京都国立博物館で「北野天神―天神さま、はじまりの物語」展を開き、当宮所蔵の国宝『北野天神縁起絵巻』（承久本）を全巻展示する予定です。

島谷 北野さんの天神縁起絵巻は、私たち、常日頃、承久本、承久本と申し上げています。天神縁起は他にも幾つかありますが、承久本はともかく大きい。迫力があるというだけでなく鮮明で丁寧に描かれており、天神縁起の総元だと感じています。それが全巻見られるのはそんなにないことであり、我々博物館の人間としても、とてもありがたいし、うれしいことです。

宮司 ありがとうございます。

島谷 その承久本をご覧になる方に一言申し上げておきたいことがあります。

宮司 どういうことでしょうか？

島谷 全部、すべて丁寧に見ていくと結構疲れてしまい、忘れてしまいます。で、ざっと見た上で自分が気に入った場面に舞い戻り、三カ所ぐらい丁寧にじっくりご覧になることをお勧めします。それが文化や信仰を心に残す一番の基準になろうかと思っています。長く伝わってきたものの大切さと美の鑑賞を心にとどめてほしいですね。

宮司 ありがとうございます。折角、ご覧になっても心に残らないのでは困りますので、展示の方でも工夫して頂けたらと思います。ところで、先生の肩書である国立文化財機構、皇居三の丸尚蔵館ですが、この社報の読者のためにどんな機関なのか教えて下さい。

― 皇室からの御寄贈品などを収蔵する皇居三の丸尚蔵館

島谷 従来からある東京・京都・奈良・九州の四つの国立博物館に皇居三の丸尚蔵館を加えた五博物館と、東京・奈良の両文化財研究所、さらには堺にあるアジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI）を合わせて国立文化財機構といっています。皇居三の丸尚蔵館は、皇居東御苑内にあり、昭和天皇の皇后だった香淳皇后や今の上皇さまが天皇陛下の時代に御寄贈頂いた品、各宮家などから御寄贈頂いた品など六千二百件を収蔵しています。皇室関係以外でも明治の初めに近衛家を始め、前田家のような華族、さらに京都の名刹などから寄贈されたものもたくさんあり、今、三の



皇居三の丸尚蔵館 全館開館時のイメージ図

丸で人気の高い伊藤若冲の『動植綵絵』は相国寺さんから献上されています。今後も皇室が集めたもの、献上されたもの、さらには国際交流で頂かれたものなど皇室に関わるような品をもっと増やし、皇室が文化財保護に果たされた役割なども伝えていきたいと思っています。ちなみに尚蔵とは、物を大切に収めるという意味が込められているという風に聞いております。

宮司 有難うございます。次に天神信仰について伺います。天神信仰は、学問・文化を始め芸術・武道など大きな広がりで信仰されています。平成十四年、御本殿の内陣奥深くより異貌

の十三体の像（鬼神像）が見つかりました。文化庁の専門の先生が調べたところ、創建年に近い十世紀中頃のもので、魍魎魍魎の侵入を阻むため都の街路に立てた神々だと聞いてびっくりしました。すぐに重要文化財に指定されましたが、天神信仰が御霊信仰から始まったことを如実に示すものであり、天神縁起にも繋がるものとして話題を呼びました。一口に天神信仰といいますが、大変多彩な信仰形態を有しています。

島谷 渡唐天神などは国も越えますから天神信仰は実に幅広い。こうしたことも展覧会などで実際に遺された文化財をご覧になることによって、感じて頂ければうれしいですね。

― 御霊信仰から皇室とのご縁の深い神社へ

宮司 御霊信仰から始まった当宮ですが、永延元年（九八七）、一條天皇より「北野天満宮天神」の神号を賜り、官幣社となり勅祭北野祭も斎行されます。一條天皇が初めて臣下を祀る北野社へ行幸されたのをきっかけに歴代天皇が行幸されるようになり、皇室とのご縁の深い神社となりました。三光門に架かる「天満宮」の勅額は後西天皇の揮毫であり、御本殿前の中庭には靈元天皇御寄進の石燈籠もあります。宝物殿には他にも皇室に関わる品々が多数収蔵されています。昨年、江戸時代の天皇や公家らが詠んで





奉納された約二千首の和歌が「北野聖廟法楽和歌」として重文指定されましたが、毎月二十五日の御縁日に宮中で菅公を慰める歌会が聖廟法楽として開かれていたことに無常の喜びを感じました。

島谷 そうした歴史的な事実を見れば、皇室が北野天満宮に敬意を置いていたことがわかります。

宮司 都の天門、北野社から始まった天神信仰ですが、今や菅公を祀る天満宮は全国に一万二千社を数えます。

島谷 それはすごいですね。

宮司 さて、先生の講演録などを拝読しますと、和魂漢才の精神を大変評価されています。和魂漢才は、御祭神の菅公が生涯一貫して貫かれた菅公精神そのものです。当宮境内には幕末に建立された「和魂漢才」の碑もあり、常々大切に行っている言葉であり、教えです。

島谷 菅公の和魂漢才という考え方は、本当に素晴らしい。その時代、その時代で優れたものは取り入れなければならないが、日本人の魂は失ってはいない。この考え方は、芸術や文化にも通じますし、政治にも通じると思っています。ですから今に通じる考え方だと言ってもよいと思います。

宮司 ありがとうございます。まさにその通りで、京都、そしてその文化の中心地であった北野は、およそ千百年に亘って世界屈指の文化・伝統を継承しつつ、新しい文化や芸術を創出し発信してきました。その原点は、まさに菅公の生きた時代、国都・平安京に端を発しますが、平安時代の国風文化の基礎を造られた方こそ、菅公であります。菅公は「和魂漢才」の精神と「誠の心」を以て、その生涯をかけて、学問・政治・教育・詩歌等

の道を極められ、その才能を遺憾なく発揮されました。中でも、宇多天皇に重用された約十四年間で、延喜式の基とも云われる『類従国史』の編纂をはじめとする数々の功績は国風文化の構築に大きく寄与されたと言えます。菅公精神の根幹である「誠の心」と「和魂漢才」の実践は、多様性と包摂性が叫ばれる現代社会において、非常に重要だと思います。

私が、菅公精神より学んだ教えの中で、持論でもあり日々大切にしている『物事の本質を踏み外さず、誠の道を極めよ』の言葉は、まさに多種多様な文化や情報が混在する現代において、真実を見極め、嘘偽りなく物事の道理に従って実践することであり、「誠の心」と「和魂漢才」の精神を貫かれた菅公に、範を求めることが出来るものと感じています。

故に菅公精神は、この千百年間にも亘って我々日本人の心の拠り所として継承されてきたのだと思います。私は「和魂」とは、縄文時代から連綿と受け継がれてきた日本人の美的感受性そのものだと思っています。先生のご専門は古筆学と伺っておりますが、どんな学問でしょうか？

島谷 私の師匠である東京国立博物館の美術課長になられた小松茂美先生が提唱された学問です。古い時代の筆跡の研究なら日本書道史とか日本美術史とかの範疇に入りますが、そんな枠の中に留まらないすべての学問を網羅しているのが古筆学だと提唱されました。私は書家になるつもりで東京教育大（現筑波大）に入ったんですが、小松先生から「学問をやれば字はうまくなる」と勧められて研究の道に入り、今に至った次第です。

「菅公の字は小野道風にそっくり」

宮司 菅公は、書の道でも名手だったと伝わっています。でも残念ながら自筆だと確認されたものはないと伺っています。字の専門家として、菅公の字についてご見解をお聞かせ下さい。

島谷 菅公・空海・小野道風（平安中期の書家）は書の三聖といわれています。しかし、伝菅公といわれる字は幾つもありますが、自筆として確認のあるものは一つもありません。しかし、「菅公の字は小野道風にそっくりだった」「道風が菅公に学んでいた」といった平安時代の記録もあります。藤原伊行（平安後期の公家で能書）の『夜鶴庭訓抄』にもそう書いてあり

ます。中国の字を勉強しながら日本風の字を作りあげたのが道風と言われていますが、それ以前に菅公がそうだったという風に私は考えています、道風は王羲之の生まれ変わりと言われていますが、その間の菅公の存在が大きいといえるかもしれません。

宮司 菅公の字は王羲之の字に近かった、というようなお話も聞いた事があります。

島谷 王羲之の字は柔らかく、日本人の好みに合いました。菅公が王羲之を勉強され、それを小野道風がお手本にした、ということも考えられます。

宮司 よくわかりました。さて、千百二十五年半萬燈祭に向けて、ここ数十年、途絶えていた神事や儀式の復興に務めています。比叡山延暦寺との間で五百五十年間途絶えていた神仏習合による北野御霊会の再興もその一つです。現在、応仁の乱で途絶えた勅祭北野祭を令和の北野祭と位置づけて研究・調査に力を注いでいます。先人たちの教え、昔を訪ね求め、そこから新しい知恵や思いを導き出して半萬燈祭を斎行するつもりです。先生のご見解をお聞きます。

島谷 温故知新よりさらに幅広い考え方が和魂漢才に繋がると思いますが、新しいものを産み出していくことが重要だと思います。昔のものをそのまま復興するのではなく今の考えをそこに込めて復興することが多くの人に受け入れられることに繋がると思っています。古式を新たに創り出すという考え方が良いと思います。

宮司 ありがとうございます。最後に文化財を守っていくことの大切さをメッセージとしてお願いします。とくに当宮に参拝するたくさんの方や子どもたちに向けても。



子どもたちにも伝えたい、文化財への責任感や愛情

島谷 文化財と言えば今、遺されているものだけを考えがちですが、それをしのぐたくさんの方の文化財があったわけです。例えば菅公の時代からすれば、千年間、三十年を一世代とすれば三十三世代の人が、いるかいないのか真剣に判断して、いると判断したものしか遺っていません。神社でも、お寺でも、そうした判断があつて遺された重要な文化財だという意識をまず持ち、その上で次の世代に遺すのは自分だという意識を持つて頂くことが大切だと申し上げておきます。そういった文化財に対する責任感や愛情を子どもたちに持つてもらいたいし、私たちも、そうなるように努力する必要があります。

宮司 多くの示唆を頂き、ありがとうございました。



島谷 弘幸（しまたにひろゆき）氏略歴

学歴 東京教育大学教育学部芸術学科書専攻
職歴 昭和五十九年四月 東京国立博物館学芸部美術課書跡室
平成六年 七月 同 学芸部美術課書跡室長

平成十三年 四月 独立行政法人国立博物館東京国立博物館学芸部資料課長
平成十五年 四月 同 文化財部展示課長
平成十九年 四月 同 文化財部長

平成二十年 四月 同 学芸部研究部長
平成二十三年 四月 同 副館長

平成二十七年 四月 独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館長
令和五年 十月 皇居三の丸尚蔵館長（現在に至る）

主要団体役職歴

平成二十九年 十月 独立行政法人国立文化財機構理事
令和三年 四月 独立行政法人国立文化財機構理事長（現在就任中）

第十七回「曲水の宴」開催

鳥のさえずりが響く中、平安の雅再現
外国人観覧者のため英語の解説も



第17回 春の曲水の宴 奉仕者

第十七回「曲水の宴」が三月八日、紅梅殿前の船出の庭で開催された。曇り空ながら時折春の淡い陽の差すまずまずの日となり、鳥のさえずりが響く中、平安時代を想起させる華やかな宴が再現され、見守る人たちを幽玄の世界に誘った。外国人の観覧者も多く、初めて英語での解説も行われ、国際色豊かな「曲水の宴」となった。

「曲水の宴」とは、小川に酒を入れた杯を流し、詠者が流れついた杯を取って飲み、兼題に即した詩歌を賦すという雅な宴である。中国から伝わり、奈良・平安時代には宮中で盛んに催された。高い文才を評価された菅公は、宇多天皇の主宰する「曲水の宴」に幾度も文人として招かれている。

こうした故事に倣い、平成二十八年秋、紅梅殿船出の庭の完成に伴って「文道大祖 風月本主」と讃えられ、今も詩歌や連歌の神として崇敬されている菅公を顕彰しようと「曲水の宴」が再興された。それも和魂漢才の精神を示された菅公に倣い和歌だけでなく漢詩も賦す「和漢朗詠」という当宮独自の形に加え、かつて北野社にいたといわれる白拍子の舞を加えた当宮の特色を織り込んだ形での再興だった。以来、文化の日の恒例祭事となるとともに春にも催行されるようになり、今回で通算十七



会場は大勢の来場者で埋め尽くされた



第三詠者（原瑠璃彦氏・杉田真理子氏）



第二詠者（近衛忠大氏・三島有紀子氏）



第一詠者（杭迫柏樹氏・中野信子氏）



藤村正則氏・京都雅楽会による朗詠



幻の芸能 白拍子（白拍子研究所）



第四詠者（金田拓真氏・山内葵生氏）

回目となった。

平安装束に身を包んだ男女八人の詠者が静々と入庭し、二人で一組となり流れに沿って座った。漢詩を賦す男性詩人は、杭迫柏樹（書道家）、近衛忠大（株式会社 curioswitch CEO、宮中歌会始 披講諸役）、原瑠璃彦（静岡大学准教授）、金田拓真（立命館大学三年生）の四氏。和歌を詠む女性歌人は、中野信子（脳科学者）、三島有紀子（映画監督）、杉田真理子（都市デザイナー、一般社団法人 for Cities）、山内葵生（立命館大学三年生）の四氏。兼題は「神」「酒」「梅」「友」。

紅梅殿上から「菅公顕彰曲水の宴保存会」を代表して、上冷泉家当主の冷泉為人氏が「漢詩と和歌で行う曲水の宴は道真公の業績を継承しているもので、北野天満宮ならではの趣向。最後までゆっくり鑑賞して下さい」と挨拶され、有斐斎弘道館館長の濱崎加奈子氏の解説によって開宴した。

紅梅殿上で、菅公作の「花時天似酔」が朗々と詠じられ、白拍子が優雅に舞った後、「流觴曲水」が始まった。

各詠者は、流れてきた杯を手にとって口に当て、兼題に即した漢詩や和歌を色紙や短冊に筆で書き留めた。杯の流れが悪いと水千姿の童子が竿を使って手伝ったが、かわいらしい仕草が観覧者の笑いと拍手を呼んでいた。

各詠者は、自作を二度披講し、解説を加えた。外国人観覧者も多く、時折入る当宮インフォメーションガイドによる英語の解説に耳を傾けていた。



童子（中小路瑞生さん）



童子（中小路千遥さん）



童子（松島俊昭さん）



童子（村木託人さん）

第十七回曲水の宴

一番 神

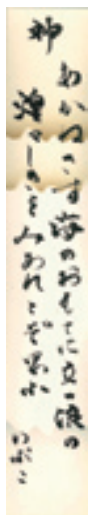
詩人 杭迫 柏樹（書道家）



春色迷人驚曲水
梅香伴我醉流觴
天神臨降同歡悅
禊宴歌吟賦樂章
春の景色は曲水に
いる人を惑わし、驚かせて、
梅の香りは私を連れて行き、
流觴の酒で酔わせてしまう。
天神が降臨して、喜びとともに、
みそぎの日の酒宴で歌を口ずさみ、詩歌を作る。

*書道家であり、中国で行われた曲水の宴にも参加したことのある詩人が、本宴に参加した喜びを込めてまさに春の曲水の宴当日の光景を詠んだ詩。

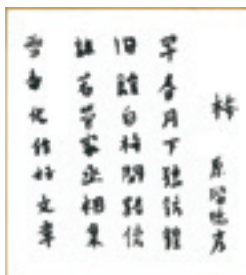
歌人 中野 信子（脳科学者）



あかねさす 海のおもてに 立つ浪の 煌々しきを みあれとぞ思ふ
*神という兼題に際し、昨春秋、歌人が宗像大社のみあれ祭にご奉仕された折の様子を思い浮かべながら詠まれたお歌。

三番 梅

詩人 原 瑠璃彦（静岡大学准教授）



早春月下独彷徨
旧館白梅開路傍
孰若菅家丞相集
雪香化作好文章
早春の月明かりのもと、一人でそぞろ歩きをしていると
古い家の白梅が道に向かって咲いているのに出会った。
だがどちらがまさるだろう、菅原道真の文集において、
白い花が変化して美しい詩句になったのと（実在の白梅もそれには及ばないだろう。）

*研究者である詩人が、夜にふと目にした白梅の美しさから、文才に長けた菅公に思いを馳せ詠んだ詩。

歌人 杉田 真理子（都市デザイナー／一般社団法人 for Cities）



春の香に 梅のひと枝 見あぐれば えならぬ味の 実ぞ思はゆる
*歌人が「梅」という兼題に際し、自身が愛してやまない梅干の味わいに思いを馳せて詠んだお歌。

二番 酒

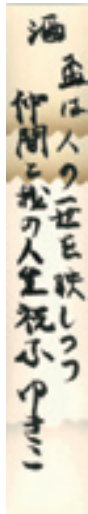
詩人 近衛 忠大（株式会社 Curioswitch CEO／宮中歌会始披露諸役）



瑠璃壺裏佳篇多
知是菅公百首歌
使我方今能対酌
問君詩意果如何
瑠璃壺の中にはすばらしい作品がたくさん納められているが、それは菅公が詠んだとされる百首の和歌だ。
もし私が今の世に二人で酒を酌み交わすことができるなら、あなたが（菅公）に尋ねよう、歌にこめられた心はいったいどのようなものかと。

*菅公は、歌を次から次へと思いつき、その都度書いては瑠璃の壺に納めていたという。その瑠璃壺を今、見ることができたら、どれほどわくわくすることだろうという詩人の思いを詠んだ詩。

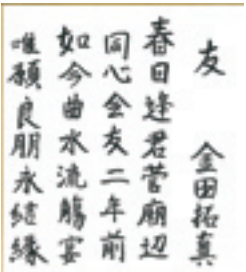
歌人 三島 有紀子（映画監督）



盃は 人の一世を 映しつつ 仲間と我の人生祝ふ
*映画監督である歌人が、盃（スクリーン）に映る誰かの人生が、仲間と自分の人生も幸福にしてくれればという願いを込めつつ、人生を寿いで詠んだお歌。

四番 友

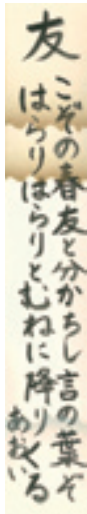
詩人 金田 拓真（立命館大学三年生）



春日逢君菅廟辺
同心会友二年前
如今曲水流觴宴
唯願良朋永結縁
春のある日、あなたと北野天満宮で出会い、
私たちが同じ志のもとで友を集めたのは二年前だった。
今日、その同じ場所で流觴を浮かべた曲水の宴に詩人として参加する私は、
このよき仲間との縁がずっと永く続くよう願わずにはいられない。

*立命館大学神社仏閣ボランティアガイドサークルを立ち上げた詩人が、ご縁がつながり曲水の宴で詩人をつとめる感慨と活動への思いを詠んだ詩。

歌人 山内 葵生（立命館大学三年生）



こぞの春 友と分かちし 言の葉ぞ はらりはらりと 心に降りくる
*卒業してはららになった友を、季節の巡りと共に思い出す様子を感慨を込めて詠んだお歌。

龍神桜 満開の花を咲かせる かつての桜の名所が蘇る



満開となった龍神桜

千本のしだれ桜で全国的に知られる桜の名所、奈良県吉野の「高見の郷」の代表である島崎章氏により、昨年十二月六日に奉納された二本の龍神桜が、四月上旬に見事な花を咲かせた。

平安時代に北野の地に開かれた右近の馬場は、謡曲「右近」にも謡われるほどの桜の名所であり、また御祭神菅公は梅のみならず、桜にも御心を寄せておられ、大宰府に左遷される際には桜にも思いを託された。

境内にはもともと数本、桜が植わっていたが、新たに奉納された龍神桜は樹齢五、六十年、高さは十数メートルと大変立派な樹であり、かつての桜の名所、北野の新たなシンボルとなった。

文化発祥の地で日本文化を体験 海外からの参拝者をお迎え

御祭神菅公は、文化芸能の神として篤い崇敬を集め、創建以来北野の地では多くの文化が発祥し、あるいは大きく花開いてきた。

最近では、日本独特の風景や文化を楽しもうと、世界中から多くの観光客が日本を訪れており、その中でも京都は特に人気の観光地となっている。そうして訪れた人々に、より日本文化に親しんでもらおうと、当宮では外国人観光客に向けインフォメーションガイドを配置し、ガイドの案内で参拝してもらえるようにするなど受け入れ態勢を整えてきた。

四月五日には外国からの団体が来宮、御本殿に昇殿しての参拝や絵馬掛け、風月殿にて上七軒の芸舞妓や巫女による抹茶体験や日本舞踊等、日本が誇る文化を存分に堪能し、日本の素晴らしさを五感で感じ、一様に笑顔で北野天満宮を後にした。

「全身全霊で舞台を 務めますので天神さまのご加護を」

「北野をどり」の成功と技芸上達を祈願 上七軒の芸舞妓らが勢ぞろいで参拝



御本殿へ向け華やかな行列が参進

「第七十三回 北野をどり」(三月二十日、四月二日)を前にして二月十三日、門前花街の上七軒の芸舞妓ら約二十人が御本殿に昇殿参拝し、「北野をどり」の成功と技芸上達を祈願した。

京都最古の花街である上七軒は、室町時代、当宮の社殿が焼け、その再建の際、造営の残木で七軒の茶屋を建て七軒茶屋と称したのが始まりとされ、当宮とは切り離せない関係にある。

この日の参拝は、「北野をどり」開幕に先立つ恒例神事。参列の芸舞妓らは神職の先導で御本殿まで参進し、祭典に臨んだ。

斎主の祝詞奏上の後、歌舞会を代表して芸妓の梅はるさんが「技芸上達を祈るとともに誠の心一筋に全身全霊を込めて北野をどりを盛り上げますので天神さまのご加護をよろしく願います」と、誓いの言葉を述べた。



大勢の参拝者が観梅を楽しんだ

令和四年に再興された雪月花の三庭苑の一つ、梅苑「花の庭」が一月二十五日から三月二十八日まで開苑され、訪れた多くの参拝者を誘った。

今年は冬の寒さが続き、全国的に梅の開花が大きく遅れたが、暖かくなつてくると一斉に花が開花し、紅白のコントラストが大変美しい光景を作り出した。特に舞台からの景色は圧巻の一言で、参拝者によっては梅の花の絨毯と感ずる人もいれば、雲海に例える人もいるなど、見る者の感性を刺激する絶景が広がった。

例年は二月半ばには見ごろを迎えるが、今年は三月に入りようやく見ごろとなるなど、およそ半月ほど開花が遅れたが、早咲きの梅と遅咲きの梅が同時に見ごろとなるなど、通常なかなかに見られない咲き具合となった。また、菅公が御育てになった紅梅を唯一受け継ぐ飛梅もまた、無事に開花した。御本殿前にある飛梅と、組織培養による飛梅両方が無事に満開となり、菅公の御心をお慰めした。観梅に來た参拝者は「去年は開花が早すぎて見ごろの時期を逃したが、今年は見ごろの花の庭を見てうれしい。開花は遅れたが、だからこそ見られた景色で大変感動した」と思い思いの場所で梅の花を撮影し、春の訪れを楽しんだ。

雪月花の三庭苑とは、江戸の連歌師にして俳諧の祖と称される松永貞徳によって造られた「雪の庭」（当時は寺町二条、現在は左京区岩倉の妙満寺）、「月の庭」（東山区の清水寺）とともに当宮の「花の庭」をいい、令和四年に再興された。

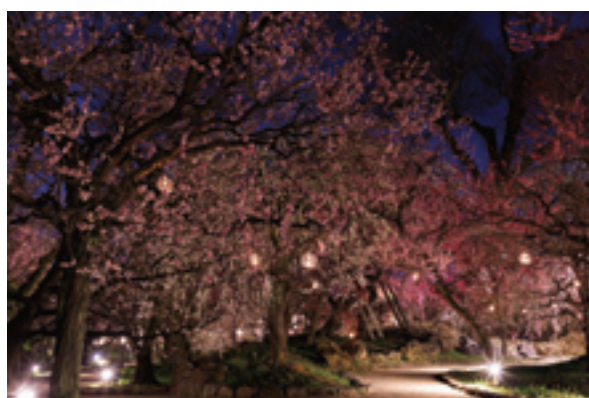
「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花 主なしとて春を忘るな」の御歌でも知られるように、梅に大変思いを寄せられた

梅苑 「花の庭」 開苑

紅白入り混じる絶景に参拝者が魅了される



舞台からの景色は圧巻の一言



ライトアップされた花の庭



北野盆梅展



オープニングセレモニー

菅公を祀る当宮では、「花の庭」を中心に境内一円に約五十種、千五百本の梅木があり、京都随一の梅の名所として国内のみならず、海外からも大勢の観梅者が訪れる。

「第四回北野盆梅展」開催 鉢植えの梅花が来場者を魅了

「第四回北野盆梅展」が、一月二十五日から二月十六日まで文道会館ホールで開催され、見事に咲いた梅の花が来場者を魅了した。

今年も歴史・規模とも日本一を誇る「長浜盆梅展」を主催する長浜観光協会（前川和彦会長）の出展協力によって開催された。

展示された盆梅は十四点で、主たるものには一点ずつ名前や由来がつけられた。『天女』は、余呉湖に伝わる羽衣伝説にちなみ命名された樹高一・八メートルの紅梅八重。『初時雨』は樹高二・四メートルの八重紅梅のしだれ。開花の遅れた梅苑の梅より一足早く咲いた盆梅が来場者の目を楽しませた。

「おいでやす 春を告げる 北野盆梅展と長浜盆梅展へ」開催

京都駅ビルにて特別ブース開設

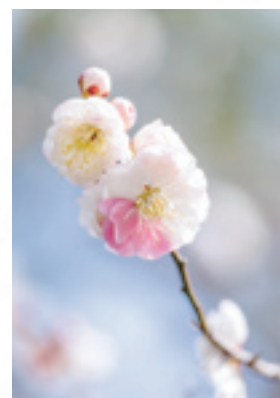
北野盆梅展に先立ち京都駅ビルにて「おいでやす 春を告げる北野盆梅展と長浜盆梅展へ」と題して、特設ブースを一月十八日から二十六日まで開設した。初日にはオープニングセレモニーを行い、若菜真丈京都駅ビル開発株式会社代表取締役社長や、前川和彦長浜観光協会会長がそれぞれ挨拶された。期間中は長浜観光協会による盆梅の展示や解説、豪華景品の当たる抽選会などが催され、京都駅ビルの利用者が興味深そうに足を止めていた。



多くの人が特設ブースに立ち寄った



見事な花をつけた盆梅



紅白を咲分ける「思いのまま」

梅花の咲き具合遅れるも連歌会は盛況 連歌井戸の隣、紅梅殿で「梅ヶ枝連歌会」張行



連歌会の様子

京都連歌の会による恒例の「梅ヶ枝連歌会」が三月二日、紅梅殿で張行され「賦花之何連歌」で詠まれた四十四句が奉納された。

当宮は「文道大祖風月本主」と崇められた菅公が御祭神であり、古くから和歌の神・連歌の神として崇敬を集めてきた。

連歌については、中世、社頭の内外二か所に連歌会所が設けられ、宗祇・兼載といった有名連歌師が、花の下宗匠“となつて連歌興行がしばしば行われた。すべて菅公を楽しませる聖廟法楽として行われており、詠まれた連歌懐紙は御神前に奉納されている。

京都連歌の会は、このように伝統を引き継いで、毎年春には「梅ヶ枝連歌会」を、また秋には「もみじ連歌会」を張行している。

紅梅殿は、かつての連歌会所の井戸のすぐ隣という絶好の場所。詠まれた連歌懐紙は、次々表に張り出された。今年の梅花の咲き具合は遅れていたが、連歌の会場は盛況そのもので、参拝者が次々足を止めて、様子を伺い、張り出された懐紙に見入ったり、連歌井戸の説明文に目を止めていた。

紅梅殿は、かつての連歌会所の井戸のすぐ隣という絶好の場所。詠まれた連歌懐紙は、次々表に張り出された。今年の梅花の咲き具合は遅れていたが、連歌の会場は盛況そのもので、参拝者が次々足を止めて、様子を伺い、張り出された懐紙に見入ったり、連歌井戸の説明文に目を止めていた。



御本殿で連歌を奉納

連歌奉納

令和七年三月二日
於 北野天満宮 紅梅殿

宗匠 西田 正純
執筆 徳久 青檜

賦花之何連歌

初折表

梅が香や菅公精神伝ふる歌聖

東風もやさしく集ひ来る宮

初雲雀霞遠くにさへづりて

のどけき道を旅に出でばや

もやひ舟水尾を重ねてのぼるらむ

白菊映ゆる川の辺の里

天地を満たして望は音もなし

峰のはるけき秋のさびしさ

初折裏

夢いづこ力つくして山越えむ

麻を績みつつぞ語りし友と

大前にいつはりならぬ恋もがな

鈴のまことをしのぶ文殻

嘆くとして音こそ絶えせねわりなくも

しぐれの雨に心添ひゆく

迷へるや五つの濁りいかがせん

尼にもならでみ仏がもと

山深くかたぶく月の面涼し

しでの田長の名をあぐるほど

渡らむはいつを瀬ならむ賀茂の水

汐干に海の路は踏めれど

ゆきゆきて霊登サリの花を見む

草芳しき学舎が窓

重十九

正純

貞子

稔

和行

純一

かおり

佐代子

亮子

満千子

青檜

稔

貞子

純一

和行

佐代子

かおり

亮子

青檜

貞禮

満千子

「一期一会」と「温故知新」



茶杓 発句の題が付けられている

たれ、名残表三句目の内容をお伝えしたところ、英語で、

A secret and hidden love is like an angry river,
somewhere, somehow, it has to flow.

と付け句の案を示されました。

直訳すれば「人に知られず秘めた想いはまるで荒れ狂う河のようで、思わぬところで、思わぬ形でどうしても溢れ出してしまふ。」といった意味でしょうが、七七の短句では表現しきれず、衆知を集めて名残表四で前半を「怒れる河ぞ忍ぶ恋とは」、五で後半を「さもあらばあれ逢はではあふるるほかもなき」と表現させていただきました。忍ぶ恋を水や川にたとえた例は百人一首でも見られますが、コントロールドきな荒れ狂う河にたとえる発想はわが国の連歌にはなく、発想の自由さに快い驚きを感じました。

二組目の出会いはお茶の先生の方で、所蔵の明治時代の茶杓の箱書きに「発句」が書かれているので連歌をされている方にご覧いただきたいとご持参いただき、併せて付け句をお持ちいただきました。少し表現を変えさせていただきました、名残表十四の「香たき穏しかれと夜寒を」として頂戴しました。

茶杓は明治時代の作。四季になぞらえた四枝一組で、銘はそれぞれ「野鶯」「発句」「萩の風」「雪散風」となっており、「発句」の筒には「清き瀬に心洗や身もすゝし」と書かれていました。春夏秋冬の季節を表現した銘となっています。

目の保養をさせていただき、さらにこの御縁で五月の月次会を「清き瀬に」の句を発句として頂戴しようという思わぬ展開になりました。

戦国時代に初めて西洋から日本に来たのがポルトガル人といわれていますが、五百年以上経ってポルトガルの方の思いが連歌にいかされ、また明治の先人の発句が令和の発句としてよみがえるという、「一期一会」「温故知新」という言葉をあらためて実感した充実した一日となりました。

(京都連歌の会 西田正純・森亮子・押川かおり)

名残折表

星影にうつし出さるる紅雲
舞ひてかなしや踊子の夢
なかなか守るにしかぬおもひこそ
怒れる河ぞ忍ぶ恋とは
さもあらばあれ逢はではあふるるほかもなき
吉備津の釜の音はならざり
写経終へ蓮の裏に風宿る
いつしか晴れよ世の中の闇
そこはかと昔を語る冬の雨
やまぬ雪さへうるはしき里
ゆく人は装ひやつしわたるらん
心も染むる遠方の色々
月の光ゆらぐ梢を漏り落ちて
香たき穏しかれと夜寒を

楠彦
まり絵
奈智子
ディオゴ
ディオゴ
満千子
貞子
純一
佐代子
亮子
和行
かおり
貞禮
美代子

名残折裏

岨路や雁渡ることいとほしく
鹿の声添ふ笹原の末
やはらかき苔をふみつつ誰が家ぞ
沢辺の水は色美しく
笛の音も春なれしはしたたずみて
雲にとどくか蝶の連れ舞ひ
九重もまたたぐひなく花みちよ
ひひなのよひをとす伴の社

佐代子
総
満千子
奈智子
まり絵
正純
純一
青檜

句上

橘 重十九 一 栗田純一 四 服部満千子 四 笠著、デイオゴ二
西田正純 二 押川かおり 三 徳久青檜 三 笠著、美代子一
河合貞子 三 新田佐代子 四 東川楠彦 一
関本総 三 金貞禮 三 関子まり絵 二
中村和行 三 森亮子 三 坂上奈智子 二

「華道」が国の無形文化財に登録

文化・芸能の神、天神さまに一層の精進誓い華道家元池坊が献華式を斎行
御神前で献華、西廻廊では奉賛いけばな展



華やかに献華式斎行

華道家元池坊による献華式が二月九日、当宮で斎行され、御本殿において厳粛なる献華の祭儀が行われた。西廻廊では献華祭に奉賛し、八、九の両日「奉賛いけばな池坊展」が開催され、時折、雪の降る寒さの中、多くの参拝者が出展された作品に見入った。

御祭神・菅公は、平安の昔から「文道大祖」「風月本主」と讃えられ、文化芸術活動の祖としての信仰を集めている。華道家元池坊との御神縁も深く、毎年正月に神楽殿で開催される京都支部による奉納献華展は、境内を彩る恒例行事として初詣参拝者の目を楽ませている。

御神前で献華が行われる献華祭は、平成十四年の御神忌千百年大萬燈祭に際し第一回が行われ、二回目は能登半島地震の被災地復興への祈りを込めて昨年一月に行われた。

三回目となる今回は、昨年十二月に「華道」が無形文化財に登録された事に伴い、一層の精進を誓って行われたもの。

九日朝、城野眞理子京都支部長ら参列者約二十人が文道会館前に参集、神職の先導で楼門をくぐり御本殿まで静々と参進した。午前十時、御本殿でお祓いを受けた後、支部の華道家二人が、紅梅と白梅をいけ、神職が梅をこよなく愛された菅公の御神前に供えた。

斎主の玉串奉奠に続き参列者を代表して城野眞理



池坊京都支部 城野眞理子支部長による玉串拝礼



いけばなの歴史と極意を学ぶ



華やかに彩られた西回廊

子支部長が玉串拝礼され、参列者全員が一層の精進を誓って拝礼した。

「奉賛いけばな展」は、八日午後、時折、激しく雪の降る中、西廻廊において支部の華道家が心を込めて二十作をいけた。展示は翌九日も行われ、多くの参拝者を池坊のいけばなの世界に引き入れた。

風月殿で京都府主催「京のかがやき体験教室」 池坊の先生の指導で三十人の子どもがいけばな体験

「京のかがやき体験教室」が二月八日、風月殿で開催され、約三十人の小中学生がいけばなを体験した。

この催しは、伝統文化を未来につなげるため、子どもたちにその一端を体験してもらおうという京都府の試み。子どもとその保護者の前で一般財団法人池坊華道会の先生が、「いけばなは室町時代に生まれた日本の伝統文化で、花の命を大切にするという心がある。今日学んだことで、家に帰ってちよつと花をいけてみようという切っ掛けが出来ればうれしい」と前置きし、いけばなの良さを様々話した。

また、ハサミの持ち方や剣山へのさし方などの説明が行われた後、ガーベラ・スイートピー・フリージアなど六種類の花を使って手本のいけ方を披露した。「どの花を主役にするかまず決め、主役を引き立てる仲間を配置していくことが大事」との極意も示された。

子どもたちは、配ら

れた同様の花々を使つてのいけばな体験に挑戦した。付き添いの母親らに相談する子どももいたが、大半は自らの感性で自由にいきいき、上々の体験教室となった。



真摯に花と向き合う子供たち



先生の指導によるいけばな体験



新緑と山吹のコントラストが美しい青もみじ



境内西側に広がる豊太閤ゆかりの 歴史的遺構「史跡御土居」公開 山吹の花と青もみじ、コントラスト色鮮やかに



天暦元年（九四七）に創建されて以来千有余年に亘る歴史を誇る当宮境内には、現在でも数多くの遺構が残っている。境内西側一帯に広がる史跡御土居もその一つである。

史跡御土居は天正十九年（一五九一）、秀吉公が行った都の整備事業の一環として築いたものであり、都を守る防塁や川の氾濫から市中を守る堤防としての役割を持ち、築造当時、総延長約二十三キロにもわたる土塁が京都を取り囲みように巡らされた。江戸時代から明治時代にかけては、御土居はその役目を終えるとともに徐々に取り壊されていき、現在では史跡に指定された北区や上京区の九カ所にその姿を残すのみとなった。中でも当宮の御土居は当時の姿をそのまま残しており、北野にのみ唯一造られた石造りの暗渠（悪水抜き）など、他にはない貴重な歴史的遺構が現存している。

令和九年の半萬燈祭に向けた記念事業の一環として、平成十九年から御土居の整備を進め、現在では秋の紅葉と初夏の青もみじの景勝地として全国から参拝者が訪れている。

今シーズンは、四月十日から六月二十二日まで公開する。山吹が見頃を迎えると、新緑と黄色のコントラストで苑内が色鮮やかに彩られる。また、ゴールデンウィーク期間中の夜間特別公開（ライトアップ）も引き続き実施し、昼は鮮やかで青く澄んだ光景を、夜はライトアップにより浮かび上がる青もみじの幽玄な景色を楽しむことが出来る。



ライトアップされると大きく雰囲気が変わる

乙巳 初詣

三が日も好天に恵まれ、多くの参拝者が家内安全を祈る
入試合格の願いを込めた若者の祈り篤く



令和七年、巳年の初詣は三が日も好天に恵まれ、御本殿前は連日「家内安全」「無病息災」などを祈る参拝者で大賑わいとなった。参道を始めとする境内一円には多くの露店が並んで活況を呈し、受験シーズンに入っていることもあり、牛社・絵馬掛け所界隈は、長い行列が出来ることもあり、「志望校合格」や「学業向上」を願う若者たちや、その家族らによる篤い祈りの熱気に包まれた。

巳年の新年を迎えるための最初の神事は、三十一日午後四時から御本殿前の中庭で斎行された年越しの大祓で始まった。神職・神社役員・崇敬者ら約四百人が大祓詞を奏上し、一人ひとりが切麻にて罪穢れを祓った。

同七時から御本殿での除夜祭斎行の後、火之御子社にて鑽火祭が斎行され、古式に則って浄火が鑽り出され、同十時から火縄授与となり、初詣が始まった。

御本殿における新年最初の神事である歳旦祭は、元日午前七時から官司以下神職によって斎行され、皇室並びに国家の隆盛と世界平和、氏子崇敬者を始めとする国民の弥栄を祈願した。

今年の初詣では、北野神輿会が当宮と御神縁の深い京丹後市で心を込めて栽培した米で作った特製の厄除け甘酒を数量限定ながら東門前などで頒布し、参拝者の人気を集めていた。

今回御本殿前の賽銭箱を広げたり、おみくじを結ぶ場所を増設したりといった工夫や参拝者の誘導もうまいくき、門内の混雑も少なく「事故やトラブルのない上々の巳年初詣」となった。

神前書き初め『天満書』

書の上達・学力向上を願って

筆始祭を斎行



一月二日午前九時から御本殿において、菅公御遺愛の硯などを御神前にお供えして筆始祭を斎行した。
菅公は書道の神さまとしても篤い信仰があり、その御神徳を偲ぶとともに書に親しむ人たちの書道上達を祈願する恒例の神事。併せてこの日から神前書き初め「天満書」を始めることを御奉告した。

筆に願いを託して

神前書き初め「天満書」

神前書き初め「天満書」が一月二日から四日まで絵馬所で催され、子どもたちが筆に願いを託して書き初めを行い、書き上げた作品を奉納した。



天満書は、室町時代の「裏白連歌」を発祥とする由来があり、昭和二十七年、御神前で書き初めをして書道の上達・学力向上などを祈願する現在の形になって七十数年の歴史を誇る正月の伝統行事。連日、たくさんの子どもたちが、力強く書き初めをし、力作を奉納した。
奉納作品は、二千五百七十九点（神前の部千五十四点、家庭の部千五百二十五点）を数えた。

西廻廊と絵馬所に全作品を展示
初日に審査、六百四十二点が入選



奉納された全作品は一月十七日から二十六日まで西廻廊と絵馬所で展示が行われた。「挑戦」「努力」「開花」「合格」などなど願いを込めた言葉を力強く書いた字が並び、中には具体的な大学の名を入れて合格を願う作品もあり、連日多くの参拝者が作品に見入った。

審査は、展示初日に日比野博鳳・山本悠雲・竹内勢雲・尾西正成・西村大輔の五先生と宮司によって行われ、六百四十二点（神前の部二百十点、家庭の部四百三十二点）の入選が決まった。また、梅花賞（一般賞）として二百二十五点を選んだ。

御本殿で入選者の授賞式

入選者の授賞式は天満宮賞などの特別賞に輝いた子どもや家族の参列の下、展示最終日の二十六日午後三時、御本殿で行われた。
式に先立ち奉告祭が斎行され、参列の子どもの代表が玉串を捧げ、参列者全員が拝礼して書道の上達・学力向上を祈った。この後、権宮司が受賞者に「入選おめでとう」と祝福の言葉を述べながら、一人ずつ賞状と記念品を手渡した。

入選者は次のみなさん。【敬称略】

【神前の部】

▽天満宮賞 近藤美光子（名古屋市立猪子石第一保育園年少）、岡有咲（同志社小一年）、谷口雅也（安詳小二年）、大槻実花（詳徳小三年）、谷口優菜（安詳小四年）、濱田夏芽（高木北小五年）、中田仁心里（錦林小六年）、肥後美咲（亀岡中一年）、西野友結（京都御池中二年）、宮出紅羅（南桑中三年）

▽京都新聞特別賞 片山咲奈（南丹市立園部小五年）

▽京都新聞賞 中井楓（西大路小一年）、丸山悠希（亀岡市立亀岡小二年）、嶽六花（木村書道教室、小学校三年）、山本知依（唐橋小四年）、渡部知優（桂川小六年）、安藤和華（長岡京市立長岡第三中一年）、福西希彩（深本香舟塾、中学三年）

▽鳩居堂賞 三上結有吏（北野保育園年中）、近藤美代子（名古屋市立猪高小一年）、柄本千智（錦林小二年）、河辺奈那（詳徳小三年）、山根瑠莉（下京雅小四年）、伊東夏佳（京田辺市立普賢寺小五年）、金子遥海（京田辺市立三山木小六年）、村上夏美（京都府立園部高校附属中二年）

▽金賞 柄本燈真（錦林保育園年長） 始め七十五人

▽銀賞 坂本叶（衣笠幼稚園年少） 始め百九人

▽梅花賞 小峠明日香（一般） 始め百四十二人

【家庭の部】

▽天満宮賞 熊谷直哉（松本松栄堂書道教室 京都御所南年長）、木和果乃音（吉祥院小一年）、芦田律花（啓淋社 小学校二年）、木ノ本海那（藤ノ森小三年）、久斗杏莉（亀岡市立安詳小四年）、沖谷悠輝（亀岡市立安詳小五年）、岡田鞍士（大宮小六年）、安藤和華（長岡京市立長岡第三中一年）、竹岡万弥（平安女学院中二年）、木田真優（西賀茂中三年）

▽京都新聞賞 城島花音（啓淋社 小学校一年）、柄本千智（錦林小二年）、松山幸愛（大穴南教室 小学校三年）、山岡ひびき（竹田小四年）、土山音空（伏見住吉小五年）、田原煌生（亀岡市立安詳小六年）、肥後美咲（亀岡市立亀岡中一年）

▽鳩居堂賞 柄本燈真（錦林保育園年長）、谷口雅也（亀岡市立安詳小二年）、長松有俊（立命館小三年）、谷口優菜（亀岡市立安詳小四年）、木原奈月（百枝書道教室 小学校五年）、谷口安優美（亀岡市立つじヶ丘小六年）、中井健太（田辺中二年）

▽金賞 水原たまき（北野幼稚園年長） 始め百六十二人

▽銀賞 東小和乃（京都きらら幼稚園年少） 始め二百四十六人

▽梅花賞 矢田めぐみ（一般） 始め八十三人

池坊京都支部の献華展

池坊京都支部による献華展が元日と二日、神楽殿で催された。

新春を彩る恒例の催しで、立花・生花・自由花で生けられた華やかな花が展示され、初詣参拝者の目を楽しませた。



新春奉納狂言

「末廣かり」など六番上演



新春の恒例となっている奉納狂言が一月三日、猿楽會と茂山忠三郎社中によって神楽殿で催され、初詣参拝者を楽しませた。

「末廣かり」「鬼瓦」「土筆」「盆山」「清水」「福之神」の六番が次々上演された。好天にも恵まれ、多くの初詣参拝者が足を止めて日本の伝統芸能に見入った。

〈審査員の講評〉

天満書は、京都の正月の風物詩の一つとなっている。長年続いているのは、北野天満宮の御祭神・菅原道真公が学問の神として慕われている証だと思う。うまく書くということ以上に、新年に当たって一枚の清書に自分の思い・夢を託すことが重要だと思う。

例年、その年の干支を書いたものが多いが、今年は巳、へび年なので少し書きづらいか、少なかった。バブル期やコロナ前と比べると、出品点数こそ若干少なくなっているが、反面、今年はかつて見られたような浮ついた作品や遊び心の作品はほとんどなく、真面目に書いた作品が多くうれしかった。AI時代は、さらに進んでいくだろうが、正月に自分の重要な一言を選び、真つすぐな心で書き、御神前に奉納する天満書は、途絶えてはならないものだ。付き添いのお母さん方も、子どもたちにその気持ちを植え付けてほしい。

新春「そろばんはじき初め」

約百六十人の小中学生が上達を祈願

新春「そろばんはじき初め」が一月五日、絵馬所にて小学生を中心に約百六十人の小中学生が参加して行われた。

コロナ禍によって三年間中断したものの、昨年から再開された新春の恒例行事。全員が御本殿に昇殿参拝し、学業向上とそろばんの上達を祈願した後、会場の絵馬所に移動した。開会に当たり



神職が「天神さまには学業だけでなく様々な信仰がある。難解な数学の問題などを書いて奉納された江戸時代の算額も掛かっているこの絵馬所でははじき初め、頑張って下さい」と挨拶した。

全国大会で読み上げ暗算・フラッシュ暗算の日本一に輝いた実績を持つ立命館大学四年生本間聖康さんによる模範技能の披露が行われると、その絶技に会場が大いに沸いた。その後、子どもたちはフラッシュ暗算などを行った後、長さ五・五メートル、四百桁もあるジャンボそろばんなどを使っ

招福の梅枝「思いのまま」

今年も人気

招福の梅枝の縁起物「思いのまま」の授与が元旦から始まり、今年もコロナ禍の完全収束などを願う参拝者の人気を呼んだ。

梅枝「思いのまま」は、境内神域で剪定した梅の枝に瓢箪を取り付けた縁起物。瓢箪には菅公を偲ぶ梅花祭で御神前に供える特殊神饌の「厄除け玄米」が入っており、邪気消除と厄除けの願いを込めた当宮ならではの縁起物。花瓶に挿しておけば赤や白の梅の花が咲くことから正月の授与品として定着している。

今年もコロナの完全収束や志望校合格などを願う参拝者の人気をさらっていた。



菅公伝承に基づく神事

影向松前で初雪祭を斎行

京都に初雪が降った一月十日、午前十時から一の鳥居をくぐってすぐ東側に位置する影向松の前で初雪祭を斎行した。

昨年は一月八日に斎行しており、ほとんど同じ時期の斎行となったが、昨年と違い一時視界が白くなるほど猛烈に吹雪くときもあったが、祭典中は一転して穏やかな気候に恵まれ、積もった雪もすぐに解けだしていた。

初雪祭は、毎年三冬（立冬から立春の前日）の間に初雪が降れば、菅公が影向松に降臨されて歌を詠まれるという伝承に基づき古くから斎行されている当宮ならではの歴史ある神事。

影向松に降臨された菅公の御神前に祭壇を設え、神饌と合わせて御遺愛の硯や筆、短冊などをお供えし、神職が祝詞を奏上し、菅公に初雪を楽しんで頂くよう厳粛に祭典を執り行った。



節分祭

御本殿で厳粛に斎行 追儺狂言・日本舞踊奉納・福豆まき



狂言師・芸舞妓らによる『福豆まき』



節分祭に供えられる『福豆』



茂山千五郎社中『北野追儺狂言』



上七軒歌舞会『日本舞踊』

立春の前日に当たる節分の二月二日、御本殿において午前十時から厳粛に節分祭を斎行した。

午後からは、恒例となる北野追儺狂言・日本舞踊の奉納といった神賑行事が神楽殿で行われ、最後は狂言方や芸舞妓によって威勢よく福豆まきが行われ、華やかで賑やかな節分行事に境内は大盛り上がりとなった。

京都では古来、節分ゆかりの四社寺に参拝する「四方詣り」の風習があり、当宮は最後にお参りをする重要な神社として、崇敬者から篤い信仰を集めている。

こうした経緯もあって北野追儺狂言では、当宮三光門前に祀られる摂社福部社の御祭神「福の神」が、京の都を荒らす鬼を追い払うという、昭和二十五年に創られた当宮独自の狂言が演じられる。今年も茂山千五郎社中によって奉納され、威張っていた鬼が福の神から豆をまかれて退散すると、見守る参拝者から盛大な拍手が沸き起こった。

この後、上七軒歌舞会の芸舞妓による日本舞踊の奉納があり、最後には舞台に立った狂言方や芸舞妓による福豆まきとなり、「福は内!」「鬼は外!」と、威勢のよい掛け声とともに福豆袋が参拝者に向けてまかれ、みなあらずって福豆を授かるうと手を伸ばしていた。この日は、穏やかな気候もあって神楽殿の周囲は参拝者で埋め尽くされ、賑やかな節分となった。



初天神

穏やかな日和、受験生も多く

子供の成長と学業成就を守護する社として崇敬篤い伴氏社（表参道・三ノ鳥居そば）の例祭を、一月十四日に斎行した。御祭神は菅公の母君で、大伴の出生であることにより伴氏社と称されている。

菅公元服の折には「久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな」（訳 こうして元服した上は、月に生えているという桂の木も折るばかりに大いに才名を上げて、学問の家としての我が一族の名を高めてほしい）という歌を残されている。

元々は石造りの五輪塔が奉納されていたが、明治の神仏分離政策により、現在は当宮南に隣接する東向観音寺に移設されている。社殿前の石鳥居は鎌倉時代制作の鳥居で、石作りの台座には蓮弁を模った珍しい形をしていることから、京都市の重要美術品にも指定されている。

伴氏社例祭 菅公母君を偲ぶ

今年最初の御縁日、一月二十五日の初天神は、穏やかな日和となり、終日、参拝者の足並みが途絶えぬ賑わいとなった。

表参道を始め境内一円には多くの露店が並び、威勢のよい呼び込みの声が飛び交い、親子連れなど多くの参拝者で混み合った。すでに受験シーズンに入っており、一顧成就の牛社前は合格祈願の行列が出来、絵馬掛け所の前は、若者の熱気に包まれた。

五穀豊穰を祈る大祭 春祭を斎行



今年五穀豊穰を祈念する大祭、春祭を三月一日午前十時から神社役員・崇敬者ら参列の下、御本殿にて厳粛に斎行した。

当宮では古来、五穀豊穰を祈る「祈年祭」を「春祭」と称して斎行している。

宮司が祝詞を奏上した後、菅公五歳の時の御歌に曲と舞をつけた巫女舞「紅わらべ」が奉納された。神職が朗々と詠じるなか、梅の枝を手にした巫女が優雅に舞い上げた。この後、宮司をはじめ参列者が次々玉串を捧げ拝礼し、今年一年を無事に過ごせることを祈った。

今年例年にないほど梅の開花が遅れており、三月に入った時点で未だ見ごろを迎えるに至らなかったが、暖かな気候もあつて、祭典後には参列者は梅苑「花の庭」にて観梅を楽しんだ。

十五万枚の参拝者の願いを焚き上げ

祈願絵馬焼納式を斎行

昨年一年間にわたり入試合格・学業向上・無病息災・災難厄除けなど、様々な祈願を込めて奉納された絵馬や割符を焚き上げ、願掛けされた参拝者の諸願成就を祈願する祈願絵馬焼納式を、四月四日午前十時から境内中ノ森広場で斎行した。

新年度を迎えて斎行する恒例の神事で、絵馬や割符は、日本人だけでなく海外の参拝者によつて奉納されたものも多く増え、その数約十五万枚にのぼった。

忌竹にしめ縄を張り巡らした祭場に、奉納された絵馬や割符がうず高く積み上げられ、斎主が祝詞を奏上した後、御本殿で鑽り出した浄火を絵馬に点火すると、パチパチと音を立てて勢いよく燃え上がった。



お焚き上げは午後まで続き、その間神職が交代で**おほろことば**大祓詞を奏上。奉納者それぞれの願意が成就するよう祈った。

お焚き上げの炎は表参道からもよく見え、参拝者が次々に足を止めて見守り、中には神職が奏上する大祓詞を聞きながら手を合わせる人も多くいた。



六月九日

宮 渡 祭 (中祭式)

多治比文子と近江国比良宮の神主、神良種（みわのよしたね）の子太郎丸という七歳の少年に御神託があり、文子・良種・北野朝日寺の僧最珍等が協力し、平安京の北西（乾）の北野の地に菅公の神霊・菅原大神をお祀りしたのが、天暦元年（九四七）六月九日であることから、この日に御本殿において祭典を行う。



五月十三日

献 酒 祭

酒造組合や酒造会社の代表らが参列し、御神前に新酒を供え、良い酒ができたことに感謝するとともに酒造りの安全と業界の繁栄、関係者の息災を祈願する祭典。
室町時代、当宮神人に麴造りの特権（北野麴座）が与えられたことから酒造関係者の崇敬が篤く、関西を中心に約六十軒あまりの酒造会社や酒造組合より日本酒の奉納がある。



六月十日

青 柏 祭

古代より柏の葉は、御神前への供物の下に敷くために用いられ、祭事用として神聖に扱われていた。
当宮でもこの日に柏の青葉に御飯を包む熟饌と呼ばれる特殊神饌を御神前に供え、日々の神恩に感謝し、季節の変わり目の無病息災を祈願する。
また、クルミと梅水を特に供える。



六月一日

火之御子社例祭

「雷除大祭」の通称で親しまれる摂社火之御子社の例祭。
火雷神（からいしん）を祀った火之御子社は、本社北野天満宮鎮座以前よりこの地にあり「北野の雷公（らいこう）」と称えられ、雷電・火難・五穀の守護として、朝廷より篤い崇敬を受けた。
当日の特別授与品として雷除のお守りや御札を授与するほか、参道には露店が立ち並び終日賑わう。



六月二十五日

御誕辰祭（中祭式） 大茅の輪くぐり

六月二十五日は菅公御生誕の日にあたるため、御本殿にて御誕辰祭を斎行する。

菅公は、菅原是善公（文章博士）の第三子として、承和十二年（八四五）六月二十五日、京の都で生を享けられた。またこの日は「夏越天神」といわれ、酷暑の真夏をひかえ、氏子・崇敬者の健康と厄除を願い、楼門で、直径五メートルの「大茅の輪くぐり」を行う。



六月上旬

梅の実ちぎり

正月の縁起物として新年の祝膳に欠かす事の出来ない「大福梅」の実摘み取りを当宮神職・巫女・職員らと、氏子崇敬者の奉仕により、五月下旬から約一週間がかりで行う。

梅とゆかりの深い当宮には、約五十種・千五百本の梅の木があり、収穫は、例年約三トン程を見込んでおり、採取した後すぐに塩漬され、梅雨明けを待って境内で土用干しを行う。



六月三十日

夏越の大祓

日常無意識のうちに身に付いた罪や穢れは、古くより六月と十二月の晦日に斎行する大祓式で祓い清められてきた。特に六月の大祓は、「夏越の大祓」と称し、素戔鳴尊に旅の宿を供し難儀を救った蘇民将来の故事に倣い、茅の輪をくぐり、罪や穢れ、厄災を祓う茅の輪神事を、御本殿前中庭にて斎行する。



六月十七日

竈社例祭

家庭の守護神である庭津彦神（にわつひこのかみ）・庭津姫神（にわつひめのかみ）の二柱と火を司る火産霊神（ほむすびのかみ）をお祀りする。

古来、この神々は当宮の御供所のかまどに祀られていたもので、御社殿床下には現在も古くより使われた大釜が安置されている。

また御社殿前には「明智の鳥居」と呼ばれる石鳥居が奉納されている。

伊勢参宮

新年恒例行事の伊勢参宮が、一月二十日に行われ、神社役員・崇敬者など三十三名が参加した。

本年は酒井貞治総代が参宮団長を務められ、午前七時に北野天満宮を出発。参宮団一行は、まず豊受大神宮、続いて皇大神宮にて御垣内参拝、皇大神宮では参拝後に御神樂を受け、今年一年の平穩無事を祈念した。その後、二見興玉神社に参拝し、滞りなく全旅程を終えた。

暖かい気候で天候にも恵まれ、実りある伊勢の旅となった。



● 献茶祭保存会だより

初寄り 今年の月釜奉仕者に委嘱状交付



北野天満宮 献茶祭保存会の初寄りが一月七日、明月舎において、保存会役員と令和七年の月釜奉仕者が一堂に会して催された。

冒頭、宮司が「新年、おめでとうございます。本年は巳年であり、脱皮を繰り返して命を繋ぐ干支にあやかっています。」

きたいと思います。今年は大阪・関西万博の年であり、期間中、京都を訪れる人たちに茶文化に触れて頂く様々な催しも行われます。北野大茶湯を縁とする当宮は、その核となるものであり、皆さま方のお力添えで、この茶文化を継承しなければならぬと切に思っています。今年の献茶祭のお当番は表千家、不審菴さまでございませう。よろしくお願い致します」と新年の挨拶をした。

その後、今年の月釜奉仕者に委嘱状が交付され、宰領の渡辺孝史氏が「今年一年間、月釜奉仕の皆さま、よろしく願います」と挨拶し、畑正高氏が乾杯の音頭をとって直会に移った。

文道会館で京都柔道場連盟総会開く 山崎会長の再任承認し、第七十回東西対抗で議論

京都柔道場連盟（山崎立実会長）の令和六年度総会が三月十五日、理事会に引き続き文道会館ホールにて京都府内の道場主ら三十一人の出席のもと開かれた。

冒頭、今年度亡くなった柔道関係者らに対し黙祷を捧げた後、山崎会長が「去年四年ぶりに東西大会が開催できた。今年は七十回の大会になるので、しっかりと、次の世代に繋いでいきたい」と挨拶された。その後、議事に入り、理事会で承認された令和七年・八年度の会長も山崎会長が統括していくなどの役員人事や令和六年度の収支決算報告などが承認された。その後、東西対抗七十回大会（八月十日、岡崎武道センター）に向けて、盛り上げていく方策などについて熱の籠った議論が行われた。

当宮と柔道との関係は、江戸後期、当宮に参籠・

祈願した紀州藩士が「天神真楊流」という古武術を創設し、講道館柔道の創始者嘉納治五郎も学んでいることから講道館柔道の基礎ともいわれている。この日の総会の席上でも山崎会長が、そうした流れを説明し「今後も北野天満宮とのご縁を大切にしていきたい」と述べた。



「平和大学講座」開催 食品ロス軽減に向け討論

公益財団法人世界宗教者平和会議（WC RP）日本委員会主催の「2024年度平和大学講座」が三月十四日、文道会館で開かれた。

全員で平和への祈りを行った後、斎藤忠夫東北大学名誉教授が「世界の食の平和と人類の共存」と題して基調発題し、食品ロスの軽減に向けての活動をしていくよう呼びかけた。

この後、パネルディスカッションを展開し、世界平和実現に向けて熱い議論が交わされた。



京都百人一首・かるた研究会 第五十回「懇話と茶菓子」を開催



京都百人一首・かるた研究会（河田久章代表）主催の第五十回「懇話と茶菓子」が三月四日、文道会館ホールで開催された。

同会は毎月一回、百人一首やその歌人と縁のある社寺を訪ねて神職や僧侶の話を聴き、その後、お菓子を頂くというユニークな催し。

五十回目を数える今回は、当宮神職が学問や歌の神だけでなく、書道・華道・武道など様々な道の神として崇敬されている菅公について講演した。

また、京菓子司「鍵善良房」によって創られた和菓子が全員に提供され、

代表取締役の今西善也氏より菓子の創作意図を解説いただきながら頂戴した。



崇敬者より門燈が 新たに奉納される

二代に渡り門前を明るく照らす

当宮楼門と北門の前にある門燈は、それぞれ平成四年と八年に当宮崇敬者である内川順雅氏より奉納されたものである。以来、門前を明るく照らし参拝者を迎えていたが、近年経年劣化が見られていた。この度、ご子息である内川博雅氏より、楼門と北門の門燈を修理するとともに、新たに東門に門燈を奉納いただくこととなり、令和六年十二月十七日、御本殿にて内川様参列の下、奉納奉告式を斎行、次いでそれぞれの門燈で清祓式を斎行した。

新しくなった門燈は以前にも増して明るくなり、門をくぐる参拝者を暖かい光で迎えている。



スポーツの更なる上達を願って 京都少年フットサルリーグ 第十回北野天満宮杯を開催

特定非営利活動法人京都市サッカー協会（亀田忠幸会長）が運営する恒例の京都少年フットサルリーグが一月十九日、京都市左京区宝ヶ池フットサルコートにて今年も開催された。

小学六年生（U-12）を参加対象とし、八チームによる総当たり戦が行われた本リーグは激戦の末、estorco futsalが見事優勝を果たした。同チームには、トロフィーと賞状、そして当宮から記念品が贈られた。

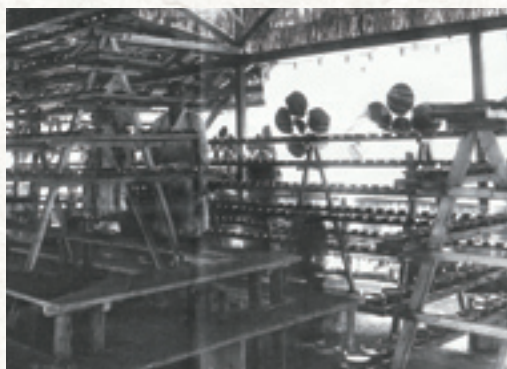


天神さん 思い出写真館

昭和三年春斎行の千二十五年半萬燈祭における五千燈明舎の内部である。

燈明舎は、明治三十五年の一千大萬燈祭を参考にして大小十三棟造られ、この五千燈明舎は、その一番大きなもの。

大祭初日の四月二十二日午前六時、御本殿において鑽火式を斎行、その浄火が燈明舎の第一燈となり、この日より二十一日間、早朝より午後九時まで灯された。夜の境内を照らす信仰の灯りは、参拝者の心を和ませたことだろう。



奉納万句の「一字名」

三年前から当宮所蔵の連歌調査を始めた。なかでも、江戸時代、祭神道真公の御忌ごとに奉納された一万句の連歌懐紙が残されている。

この連歌は、五〇年ごとの御神忌の際に奉加された太々百味・連歌万句・万灯明の一つであり、当宮の神職宮仕仲間が中心となって催したものである。

最初は慶安五年（一六五二）、七百五十年神忌、その後は五〇年ごと、元禄、宝暦、享和、嘉永の五度、御神忌ごとに一万句が詠まれている。

調査の過程で明らかになり紹介すべきことは多々あるが、今回は、そこに記された「一字名」を取り上げることとする。

「二字名」とは、和歌、連歌の懐紙・短冊などに、実名の代わりに用いる一字の名のことで、智仁親王は「色」、豊臣秀吉は「松」、寛永の三筆の一人近衛信尹は「杉」などで、『類聚名伝抄』『顕伝明名録』に載せる二六〇人余の一覧にみえる（橋本政宣氏編の『公卿事典』にはこれ以外にも一字名が補われている）。

慶安五年の北野天満宮奉納万句には、「東」・「円」の二例、元禄十四年（一七〇一）の奉納万句には、「緑」・「竹」・「桜」・「陶」・「玄」の五例、宝暦二年（一七五二）の奉納万句には「翼」一例が知られる。このうち『類聚名伝抄』等から知りえるのは慶安五年の「東」の二条右大臣光平のみである。

一方、連歌懐紙に付された注記や跡書から元禄十四年の「竹」は三宝院門跡高賢、「陶」は九条内

大臣輔実、「桜」は大納言二条綱平、「緑」は鷹司兼熙であることが知りえる。

残る「円」・「玄」・「翼」については誰か。当宮所蔵の「宮仕記録」寛政十三年（一八〇一）正月四日条に、各年の万句に句を寄せた曼殊院門跡の名と句が記されている。

七百五拾年御神忌

良恕親王様

咲花ハ天満神の光かな 円

八百年御神忌

良恕親王様

梅かゝを松にしめのや神の庭 玄

八百五十年御神忌

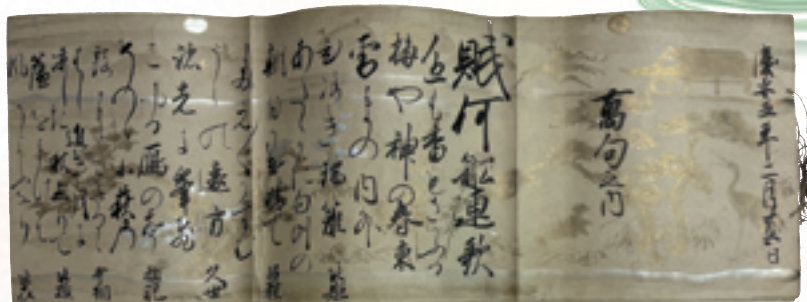
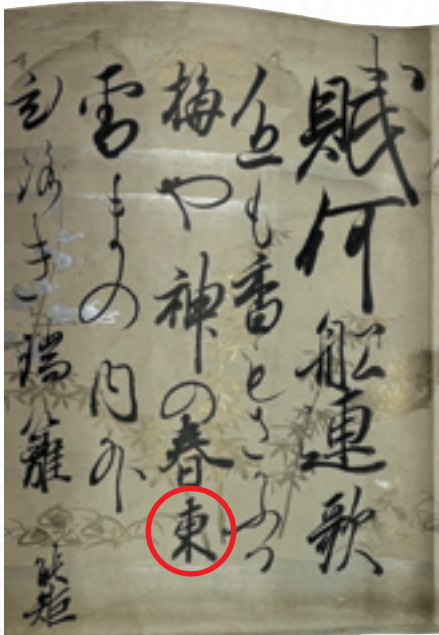
良恕親王様

梅といへは此神垣の匂ひかな

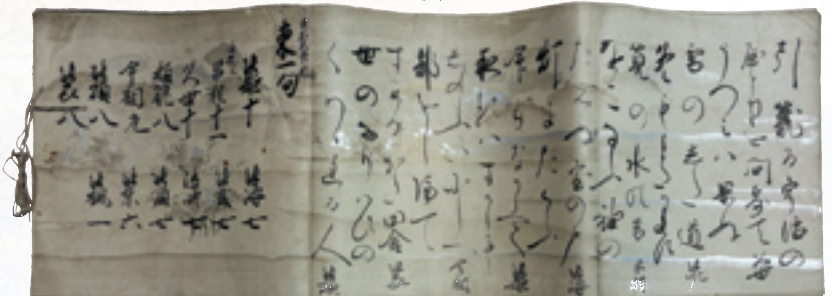
ここから慶安五年の「円」は曼殊院良恕親王、元禄十四年の「玄」が曼殊院良啓親王であることが明らかになる。

さらに「翼」は、宝暦二年の連歌懐紙の冒頭の句に「梅といへは此神垣の匂ひ哉 翼」とあることから曼殊院良啓親王であると確定できる。

『類聚名伝抄』等には載らない一字名七例が新たに判明した。



連歌表



連歌裏

天神信仰の主な歴史

(注) 歴史事項 北野天満宮事項 伝説事項

菅公薨去後、菅原大神から天門に鎮まり、天神として祀られ、およそ百年かけて醸成し、千年受け継がれる天神信仰

承和十二年	八四五	菅原道真公(菅公)御誕生(父是善母伴氏)	父是善との親子の契り
斉衡二年	八五五	初めて詩「月夜に梅花を見る」を作る	(菅公十一歳)
貞観元年	八五九	菅公元服 文章生を目指し勉学	菅公石清水八幡宮参拝
貞観四年	八六二	文章生の試験に合格	(菅公十八歳)
貞観八年	八六六	比叡山延暦寺円仁の『頭揚大戒論』の序文を書く	
貞観九年	八六七	文章得業生となる	(菅公二十三歳)
貞観十二年	八七〇	方略試(当時最高の国家試験)に合格	(菅公二十六歳)
仁和二年	八八六	この間少内記(詔勅の起草係)式部少輔など任ぜらる(菅家廊下を継承)	(菅公四十二歳)
仁和四年	八八八	讃岐守に任ぜられる	(菅公四十四歳)
寛平四年	八九二	〈阿衡問題〉につき藤原基経に意見書を送る	
寛平五年	八九三	これにより宇多天皇に挙用され政治の刷新を図ると共に平安京文化の礎を築く	
寛平六年	八九四	従四位下『三代実録』『類聚国史』の編纂に着手	
寛平七年	八九五	参議・式部大輔・左大弁を経て勘解由使長官	
寛平九年	八九七	渤海客使を接待し詩を交換 中納言従三位	(菅公五十歳)
昌泰二年	八九九	正三位に叙し中宮大夫を兼ねる	
昌泰三年	九〇〇	菅公右大臣に任ず 位人臣を極める	(菅公五十五歳)
昌泰三年	九〇〇	『菅家文章』『菅相公集』『菅家集』を献上す(三善清行、菅公に辞職を勧告)	
延喜元年	九〇一	一月二十五日大宰権帥に左遷される 大宰府南館で謫居の日々(菅公五十七歳)	
延喜三年	九〇三	詩集『菅家後集』を京の紀長谷雄に送る 天拝山で「天満大自在天神」となる	
延喜五年	九〇五	二月二十五日 配所において薨す	(菅公五十九歳)
延喜六年	九〇六	味酒安行 大宰府政庁の鬼門に御墓所・祠堂を建てる(現在の太宰府天満宮)	
延長元年	九二二	菅公を元の右大臣・正二位に叙し 左遷の宣命を破棄す	
天曆五年	九四二	多治比文子 比良宮神官の子太郎丸らに神託(朝日寺の僧最鎮)	
天曆元年	九四七	村上天皇により平安京の天門北野に鎮座す	
天曆三年	九四九	村上天皇御鳳輦御寄進	
天曆三年	九四九	村上天皇勅命により難波宮の地に菅公神霊を祀る(現在の大阪天満宮)	
天徳三年	九五九	右大臣藤原師輔 北野の神殿を増築し神宝を献ずる	
寛和二年	九八六	慶滋保胤「文道之祖詩境之主」の願文を草す	
永延元年	九八七	一條天皇より北野社官幣に預り「北野天満大自在天神」「北野天満宮天神」の神号を賜る	
正暦四年	九九三	北野社は官幣社となり勅祭北野祭が斎行される(江戸末期迄)	
寛弘元年	一〇〇四	一條天皇御鳳輦御寄進	
永保元年	一〇八一	左大臣・正一位 次いで太政大臣を追贈される	
康和三年	一一〇一	一條天皇初めて臣下を祀る北野社に行幸 以後歴代天皇の行幸に与る	
建久五年	一一九四	北野社が国家の大事を祈る二十二社に臣下で異例の加列 大宰権帥大江匡房により大宰府・安楽寺にて神幸式大祭が斎行される	
		『北野天神縁起』建久本成る	

承久元年	一二一九	『北野天神縁起』承久本成る
応永八年	一四〇一	北野経王堂成る
応仁元年	一四六七	室町幕府の崇敬で「北野祭」隆盛を極めるも応仁の乱より途絶える
天正十五年	一五八七	「北野大茶湯」を豊太閤・千利休居士ら催す
慶長八年	一六〇三	出雲阿国が北野境内で初めてややこ踊り(歌舞伎踊り)を公演(歌舞伎発祥)
慶長十二年	一六〇七	豊臣秀頼公 北野神社殿を造営する(慶長の大造営)
江戸年間	後期	後西天皇御宸筆勅額「天満宮」御寄進(三光門掲額)
元治元年	一八六四	北野をはじめ太宰府・大阪・湯島など主要な天満宮に「和魂漢才碑」建立
慶応四年	一八六八	勅命により北野祭臨時祭再興
明治四年	一八七一	神仏判然令(神仏分離)により 天台宗比叡山延暦寺のもと
明治三十五年	一九〇二	社務を統括していた曼殊院との凡そ千年間に亘る神仏習合が終わる
昭和二十七年	一九五二	北野天満宮 臣下で異例の官幣中社となる
平成十四年	二〇〇二	菅公千年大萬燈祭を斎行する
令和二年	二〇二〇	菅公千百年大萬燈祭を斎行する
令和九年	二〇二七	例祭(かつての北野祭) 斎行に伴い 比叡山延暦寺と共に北野御霊会を再興

今昔マップ

◆北野社創建(平安時代)至現在
◆現在の京都

■平安京全域
■平安宮 大内裏

注① 国都平安京大内裏で千百年間天皇の祭政が執行され、日本文化が育まれてきた。
注② 平安京・大極殿の天門に北野、鬼門に比叡山、宇多天皇創建の仁和寺などが精神的中心となって熟成の礎となった。
注③ 八幡さま、稲荷さまを始め多くの神仏は国都平安京(元の国都平城京)の近畿より全国に伝播。



紅梅殿結婚式

日本文化の発信地、
紅梅殿からはじまる家族の日

貞観元年（八五九年）菅公が十五歳の元服の折、母君は菅公の前途を祝し、

『久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな』の和歌を詠み励まされました。

我が国で最初に家風を表されたのが、菅公の母君であつたと伝えられています。立派な家風をもった穂り多い新たな家庭を築かれますようにとの願いをこめて、菅公邸宅ゆかりの紅梅殿での神前結婚式から新しい「家族」がはじまります。



火之御子社例祭 六月一日

雷除大祭

かみなりよけたいさい

●特別授与品の頒布

雷除けのお守・お札を開門より特別に授与致します。このお札は、「北野千体札」と称され、古くはこの日限り、千体限定の授与でしたが、近年はこの日より一ヶ月間授与しており、郵送での授与も受付しております。



六月三十日午後四時

なごしのおおはらえ

夏越の大祓

●茅の輪をくぐって、無病息災を祈願！

午後四時から神事を執り行い、神職とともに茅の輪くぐりを行います。茅の輪をくぐり、半年間知らず知らずのうちに身につけた厄難を祓いましょう。



どなたでも神事に
参加できます。

●人形・車形でお祓いをしましょう

人形にご家族それぞれの氏名・年齢を記します。次に人形で身体を撫で、三度息を吹きかけます。人形は祭礼日まで当宮に納めて下さい。交通安全祈願として、車形もあわせて納めましょう。

※氏子区域の皆様には、氏子総代を通じて形代をお配りします。

御縁日 境内ライトアップ

毎月25日は天神さんの御縁日。
境内特別ライトアップ！

定期購読のお知らせ

- 定期購読 1,000円（1年分）
季刊・年4回発行
- 学校・教育機関でお申込みの場合は無料発送。
- お申込み・お問い合わせは、社務所まで。



右記QRコードを携帯
電話やスマートフォン
で読み込むと北野天満
宮の最新情報にアクセスできます。上記
の各SNSでもご案内しております。

●アクセス

名神高速道路南インター又は東インターより約30分
第二京阪道路鴨川東インターより約20分
JR京都駅より市バス50系統
JR・地下鉄二条駅より市バス55系統
JR円町駅より203系統
地下鉄今出川駅より市バス51・203系統
京阪出町柳駅より市バス203系統

●参拝時間

■7時～17時
但し、毎月25日（御縁日）は6時30分から20時
※青もみじ苑・もみじ苑・梅苑「花の庭」のライト
アップ期間や正月等は夜間も開門しています。
最新情報はホームページ等のお知らせ記事をご覧
ください。

■文道会館・授与所 受付時間 9時～16時30分

京阪三条駅より市バス10系統
阪急大宮駅より市バス55系統
阪急西院駅より市バス203系統
京福電車白梅町駅より徒歩5分
いずれも北野天満宮前下車すぐ

●御祈禱

■受付時間 9時～16時
■受付場所 御本殿東側授与所

●駐車場

毎月25日は、御縁日のため駐車できませんので公共交通機関でお越しください。